

# 石工「平川与四右衛門」の軌跡

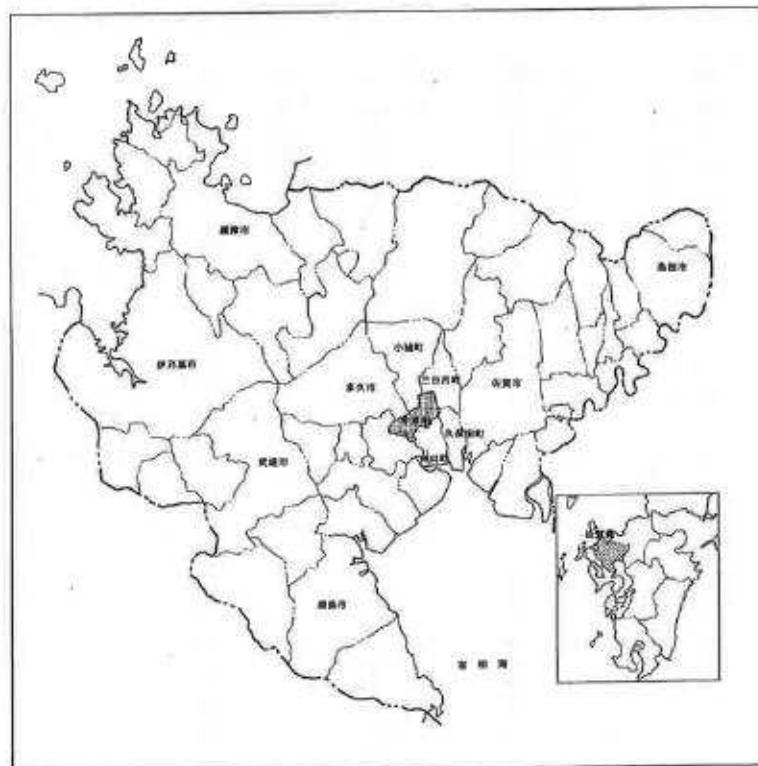
— 肥前小城郡砥川の名工が残した石仏をめぐって —

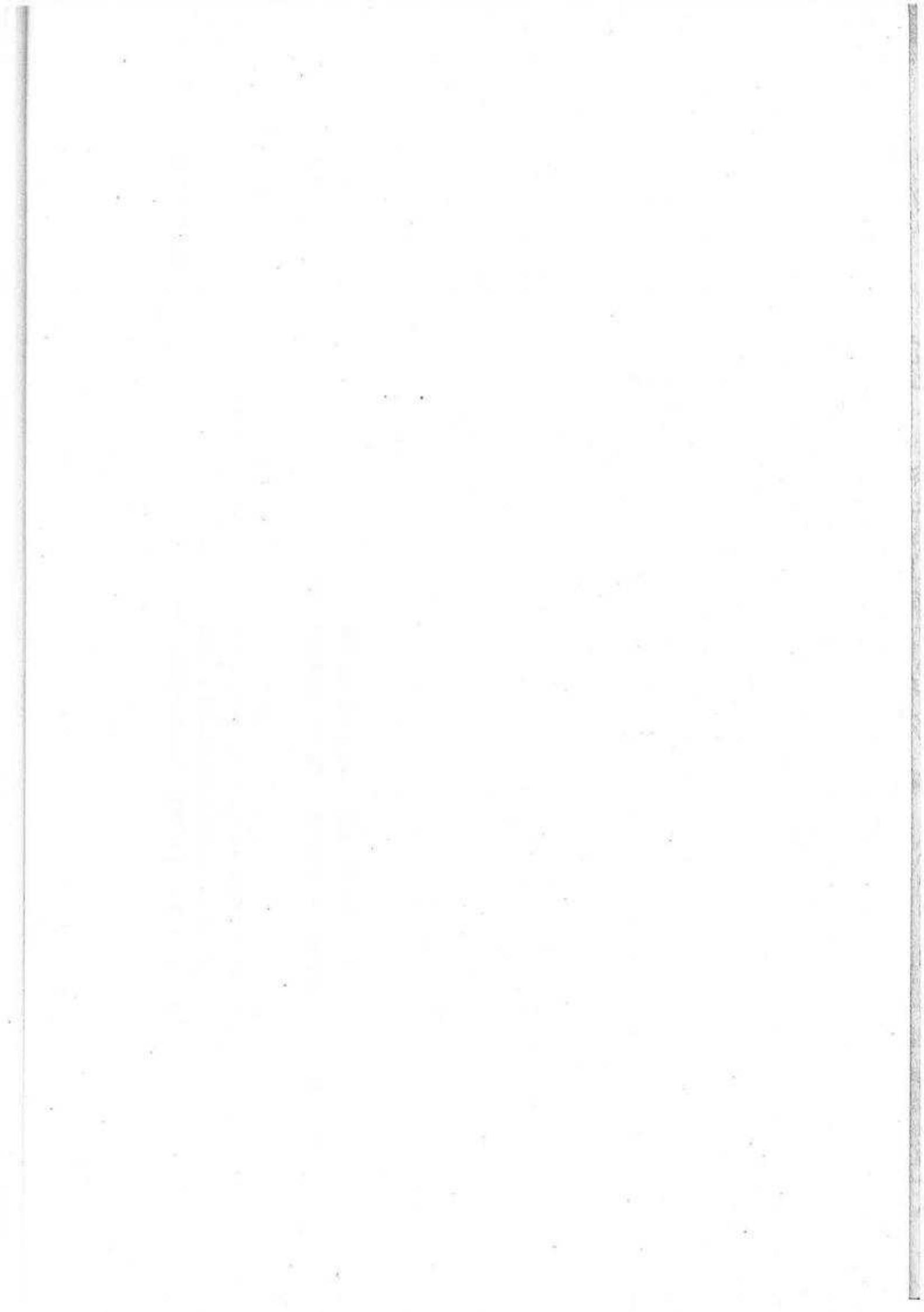
1999

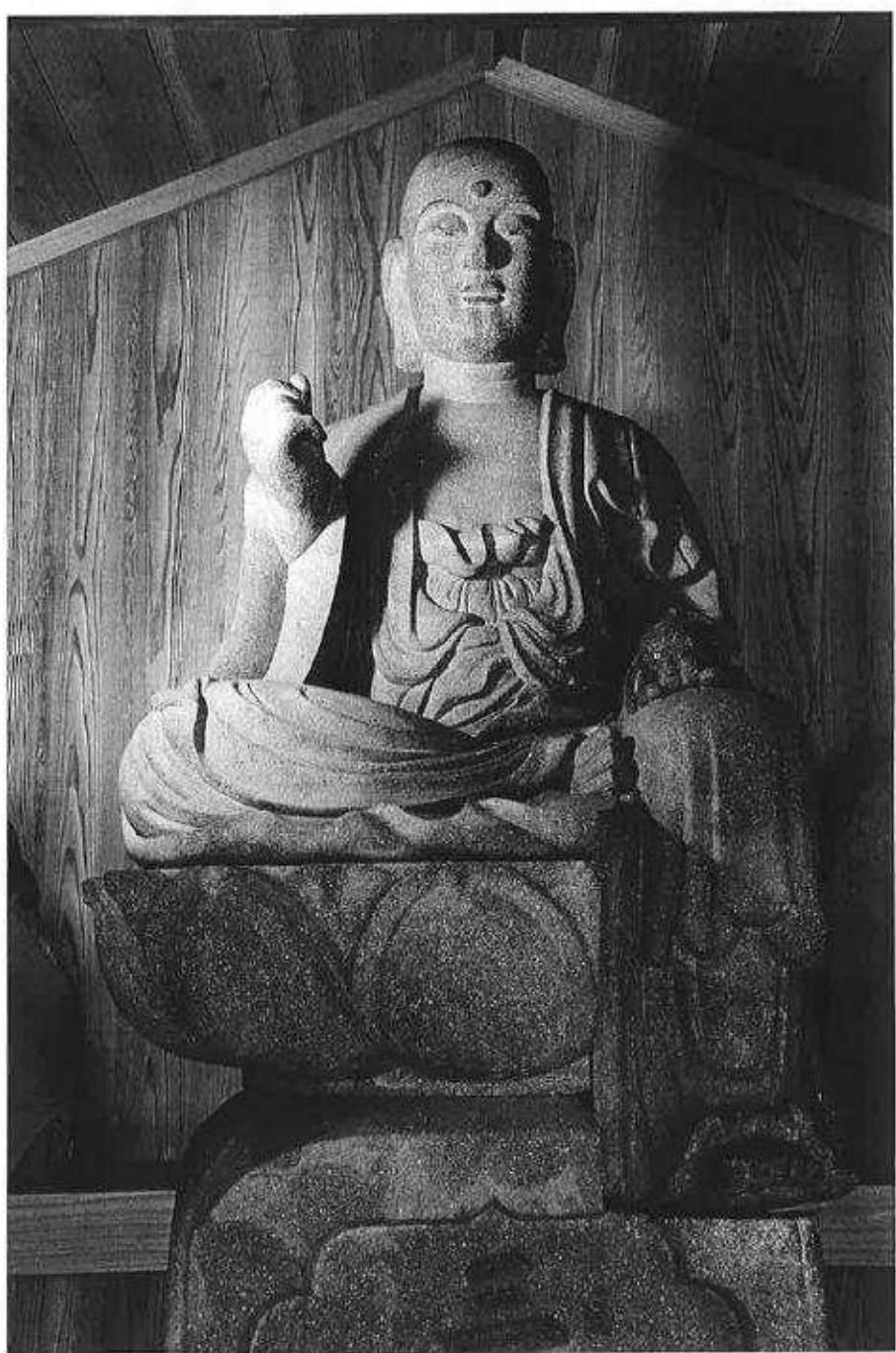
佐賀県牛津町教育委員会

# 石工「平川与四右衛門」の軌跡

— 肥前小城郡砥川の名工が残した石仏をめぐって —







## 例　　言

1. 本書は、牛津町教育委員会が牛津町文化財保護審議会（大坪勝会長）の協力を得て、平成7年度から平成9年度にかけて実施した「平川与四右衛門」銘石仏調査の記録をまとめたもので、牛津町文化財調査報告書第14集である。
2. 「平川与四右衛門」の表記については「平川」「平河」あるいは「与四右衛門」「與四右衛門」など、多種に及ぶが本書では表題のとおり「平川与四右衛門」で統一する。なお、銘文の掲載に関してはできる限り原文のままとする。
3. 本書で使用した写真は、大橋が撮影した。
4. 銘文など拓本の採取は時間的余裕が必要なため、都合により採取していない物件もある。拓本の採取は主に小森と大橋が行った。
5. フィールドワークについては牛津町文化財保護審議会委員、小森及び大橋が行った。
6. 調査データの整理は小森、大橋が行った。銘文の整理は、小森が行った。
7. 本書の執筆については、調査記録部分は大橋が担当し、考察編については各論文ごとに明記している。
8. 調査で得た写真及び銘文の拓本等データは、牛津町教育委員会で保管している。
9. 調査の実施及び報告書の作成については、竹下正博氏（佐賀県立博物館学芸員）の指導・助言を得た。また、氏には考察編において玉稿をいただいた。記して感謝いたします。
10. 本書の編集は大橋が行った。

### 【調査体制】

事務局：局長：藤瀬豊彦（牛津町教育委員会教育長）  
次長：大屋克己（　　次長）  
庶務：北島富美子（　　主査）  
岸川齊（　　主事）

調査員：  
・大坪勝、古賀一正、栗原平八、森田光子、一ノ瀬次義、（現文化財保護審議会委員）  
・玉浦祖神、大坪兵次、伊東祐康（前文化財保護審議会委員）  
・小森浩文（平安寺）  
・大橋隆司（牛津町教育委員会）

指導：佐賀県教育委員会文化財課、佐賀県立博物館　・調査協力者：中村勲、丸田利実、松江信彦

## （目　　次　　）

序文	
I.はじめに	1
1.調査に至る経緯	1
II.立地と歴史的環境	1
1.地理的環境	1
2.歴史的環境	2
(1)考古学の成果	2
(2)石工集団の成立と発展	3
III.調査概要	4
1.文化財保護審議会の活動	4
2.調査の経緯と概要	4
IV.調査記録	7
(1)黒崎権現	9
(2)近松寺	11
(3)福濟寺	12
(4)小川島観音堂	13
(5)熊野権現社	14
(6)良縁寺	15
(7)幽照寺	16
(8)浅浦道雀墓地	17
(9)福濟寺	18
(10)靈巖院	19
(11)福泉寺	21
(12)稻佐神社	22
(13)皓臺寺	23

(14)羅漢寺跡	24
(15)谷公民館	25
(16)雲巖寺	26
(17)多良岳神社	29
(18)竹追六地蔵	30
(19)西の原觀音堂	33
(20)常福寺	34
(21)永福寺	35
(22)多布施川路地	36
(23)空山觀音堂	37
(24)小田天子社	38
(25)長徳寺	38
(26)空山觀音堂	39
(27)光桂寺	40
(28)大智院跡	42
(29)印鑑神社	43
(30)皓臺寺	44
(論文)	
肥前石仏師平川与四右衛門	45
平川与四右衛門銘石仏と近世の信仰	49
平川与四右衛門的作風の無銘石仏について	52
平川与四右衛門の出自と砥川石工に関する一考察	57
あとがき	60

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経過

牛津町教育委員会では、牛津町文化財保護審議会（大坪勝会長）の協力を得て、牛津町内の石造物分布調査を開始した。平成5年度のことである。主に審議委員が調査員となり、約3年間かけて地道なデータ収集を行っていった。そして平成8年度末には、分布調査の成果をまとめた報告書として『「ふるさとの石仏」—石工の里“うしづ”に残された近世石造物を追って—』（牛津町文化財調査報告書第8集）を刊行することができた。

文化財保護審議会では、この石造物分布調査の過程で定期的に審議会を開き、専門家の意見などを参考として石仏・石造物に関する検討を深めていった。このなかで、浮かび上がってきたのが、石工「平川与四右衛門」の存在である。

九州の石造物研究者の間では、従来より砥川石工あるいは肥前石工と総称される近世石工集団の存在が知られており、精巧な石造物を制作する石工集団として注目されてきていた。なかでも、多



写真1 石仏分布調査

くの石仏に名を残す「平川与四右衛門」という人物は、肥前石工の代表的名工として位置付けられていたといえる。しかしながら、その人物像あるいは制作した石仏の内容などについての文献資料が確認されておらず、学術的な位置付けがなされていない石工であった。

そこで、文化財保護審議会は「平川与四右衛門」銘がある石仏の分布調査を実施し、そのなかから与四右衛門の位置付けや砥川石工の実態を少しでも明らかにしていくという新たな課題を掲げ、佐賀県内外の分布調査に着手したのである。

# II. 立地と歴史的環境

## 1. 地理的環境

牛津町は佐賀県中央南部、有明海沿岸地域に位置する、人口約1万人の町である。面積は13.26平方キロメートルで、昭和31年に砥川村と牛津町が合併して「牛津町」となったものである。

この町の中央部を南流するのが牛津川である。牛津川は多久川と晴気川が牛津町北部で合流し、南部では牛津江川と合流し、河口では武雄から東流してきた「六角川」と合流して有明海へ注ぐ。

こうした天山山系から派生した河川及び有明海の潮汐作用により堆積し生成された沖積粘土層が町全体の80%を占める平野部を形成する。その厚さは数mから数10mにおよび、軟弱地盤地帯を形成している。この有明海沿岸流域の地理的環境が、町の産業の発達に大きく影響を与えている。

近世期より近代にかけては、有明海の干満の差が大きいことから河川を利用した海運業が発展した。特に、牛津町を東西に走る長崎街道が整備されて宿駅が設けられた江戸時代は、牛津川と牛津江川の合流点付近には小城藩の米蔵（御蔵）も置かれ、船着き場周辺の整備も進められて宿場町を形成し、人や物の集散地となつた。しかし明治後期、鉄道の敷設により牛津川を利用した海運産業の基地は衰退の一途をたどることになる。

町全体の約20%は山地帯である。町の西部に位置するもので、大平山及び御嶽山を中心とする標高200~300mの山地と標高50m以下の空山一帯の山麓地及び九石塚一帯の低丘陵で構成されている。この山地一帯には、石材として切り出される行合野砂岩層が広がっており、「肥前砥川石工」による石材産業発展の背景となっている。

## 2. 歴史的環境

### (1)考古学の成果

牛津町周辺の歴史的環境を考古学の成果をもとにみていく。沖積平野が大部分を占めるという地理的特徴から、人間の足跡は比較的新しい時代まで待たなければならない。西部の低丘陵地帯（丸石塚遺跡周辺(1)）では旧石器時代の遺物が表採されているが、発掘調査では確認されていない。

牛津町教育委員会が実施した埋蔵文化財調査は、開発事前の確認調査及び緊急発掘調査（本調査）合わせて120ヵ所を超える。その成果に基づくと、この地域では人々は弥生時代に入って生活を営むようになったと考えられる。

北辺を接する三日月町石木では縄文晩期の遺跡（石木中高遺跡(2)）から土偶の脚部破片が出土したが、自然流路よりの出土で、生活遺構の検出は弥生時代中期まで下る。

弥生時代中期前半期になると、町内の微高地に集落が形成される。代表的な遺跡が生立ヶ里遺跡(3)である。朝鮮系渡来人に関連した遺跡であると考えられる三日月町の土生遺跡(4)から約2Kmほど南東の地点であるが、この遺跡からは当時の農

耕集落の生活様式を伝える多くの遺物が出土している。加えて、西部の低丘陵からは弥生時代中期～後期にかけての建物跡（丸石塚遺跡(5)）や塚・土壙墓・石棺が集中する墳墓（八幡山遺跡(6)）が見つかっている。

古墳時代初頭の生活遺構・遺物としては、生立ヶ里遺跡や練ヶ里遺跡(7)、及び柿橋瀬遺跡I(8)で検出されている。墳墓については、比較的古いものや大型のものは確認されておらず、赤佐古墳群(9)や空山古墳群(10)として周知化されている区域で群集墳が幾つか確認されているに過ぎない。

奈良時代の遺跡はこれまでのところ発見されていない。平安時代の建物跡や井戸跡が生立ヶ里・練ヶ里遺跡で確認されている。鎌倉時代に入ると、牛津町の大半が陸地化されていると考えられ、町東部の柿橋瀬地区（柿橋瀬遺跡(11)）や東南部の天溝町地区（牛津一本柳遺跡(12)）、西部の寺町（八幡山遺跡）などで遺構・遺物が見つかっている。

その後の中世期から近世期にかけては調査例が少ないが、長崎街道筋の宿場町遺跡については限定された範囲で発掘調査が実施され、柿橋瀬遺跡II(13)で建物跡や礎石などが確認されている。



## (2)石工集団の成立と発展

牛津町における歴史的環境でクローズアップされるのは近世期である。長崎街道沿いの牛津は宿駅、小城藩の米蔵（御蔵）といった施設が置かれ、宿場町としての機能が整備されるなか、人や物の集散が活発化して賑わいのある町として発展した。

そうした町の様子はこの街道の旅人、たとえばケンペルや伊能忠能の紀行文などにより大まかに知ることができる。しかし、最も注目される文献は牛津新町の商家である野田家の当主が安永元年から安政5年(1772~1858)までの87年間にわたってつけた『野田家日記』である。主に野田新吾兵衛によって書き続けられたと伝えられており、この日記には当時の天候や事件など社会経済一般の事象や庶民の生活について簡潔に描かれている。

ところが、こうした良好な文献資料が存在するにも関わらず、砥川谷村を拠点とした石工集団については、ほとんど記載が見当たらない。文化13年2月13日の項に「……此春、地蔵様ノ道(堂力)建立あり、施主… (省略)……石工谷清吉」という記述がある他、あと1カ所に過ぎない。また、砥川石工の成立あるいはその実態を解明できるような文献資料を他にも求めてみたが、成果はない。従って、これまで実施してきた分布調査で確認した銘文資料を手がかりにする他はない。

『牛津町史』によると『肥前古跡縁起』や『丹邱邑誌』には谷地区が石工の集落であったという記載が残されているが、その成立については不明である。その石工集団が活躍していくのは、戦国時代末の石垣石工集団で、代表的人物が文禄元年(1592)の名護屋城築城に携わる「徳永九郎左衛門俊幸」とされる。彼の子孫が値賀川内(玄海町)に住んで石工となったと伝えられている。

また、肥前鳥居の制作に携わった人物として最も古い紀年銘を持つのは、現小城町西川に住んだ石工の棟梁であった「武富清右衛門」(慶長2年=1597)である。「清右衛門」の名は代々引き継がれており、寛文10年(1670)には佐賀県大和町の石井樋の改修工事に携わる石工としてその名が刻まれている。その間にも肥前鳥居には「武富源右衛門」「平川基左衛門」など数人の石工名が登場

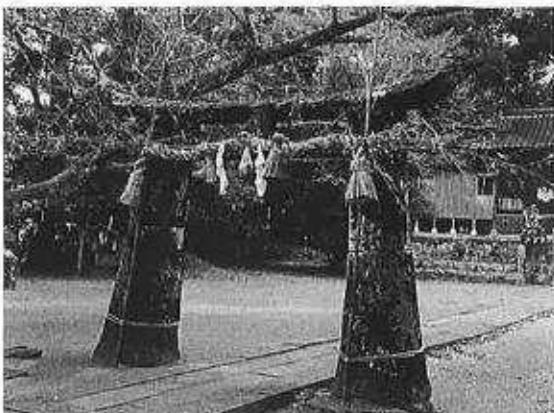


写真2 町内最古とみられる肥前鳥居(内砥川八幡神社)



写真3 町内最古の銘をもつ丸彫り観音像(永福寺)しているのが確認されている。

肥前石工の名を高めた石仏の作者として登場してくれる石工は、石垣や井樋といった土木関連の石工からやや後出する。近世期の石仏のなかで紀年銘と石工名が残るものは、相対的に少ないが、肥前石工は意外に多く残している。そのなかで、最も古い石仏に残る石工名が「平川与四右衛門」という調査結果を得ることができた。また、ほぼ同時代の小城町西川の石工「平川徳兵衛」も石仏を得意とした。この元禄期を中心とした時代に生きた2人の石工の登場が砥川石工の名を広め、江戸時代中期から後期にかけた活躍の起爆剤となったといえる。

### III. 調査概要

#### 1. 文化財保護審議会の活動

牛津町文化財保護審議会は、「ふるさとの石仏について分布調査を実施し、その文化財的価値について検討を行っていく」という目的をもって平成5年度から活動を開始した。平成8年度には約3年間の調査成果を公開するために報告書をまとめた。その間、ここで報告を行う与四右衛門銘の石仏分布調査も平行して実施しており、平成9年度までには一応の踏査を終了することができた。

また、同審議会では分布調査の成果を踏まえて学術的な検討を行い、平成7年度に「六地蔵塔（賓積寺）」、「石造空山観音三十三体石仏（長勝寺）」、「石造如意輪観音菩薩半跏坐像」（永福寺）の3件を「牛津町重要文化財」に指定するよう答申を行った。牛津町教育委員会はその答申を受け、平成7年11月1日付で牛津町初めての重要文化財指定を行っている。文化財保護審議会設置以来約15年間の活動のなかで、記念碑的な答申であったと言わなければならぬ。

その後、平成9年度までの2カ年間、石造物の分布調査成果を基に重要文化財の指定に関する審議・検討を深めてきた。その結果として、生立ヶ里八幡神社および内砥川八幡神社の肥前鳥居2件、平川与四右衛門銘石仏として、「布袋像」（熊野権現社）、「千手観音菩薩坐像」（谷公民館）、「如意輪観音菩薩半跏坐像」（常福寺）、「地蔵菩薩半跏坐像」（永福寺）の4件について答申を行い、町重要文化財の指定を実現してきた。



写真4 県外の分布調査（西の原観音堂）



写真5 県外の分布調査（合志町竹迫）

#### 2. 調査の経過と概要

平川与四右衛門銘石仏の分布調査は、まず町内の近世石仏分布調査のなかで開始されている。以前より、牛津町内には6体の石仏が確認されており、その6体に関する写真撮影及び銘文の拓本採取などデータ収集がスタートであった。

町内の調査を行う一方で、佐賀県内あるいはその他の地域における分布がどうなっているのか、その調査をどのようにしていくかが大きな課題となった。幸いにも、石造物研究に先駆をつけられた郷土史研究家中村黙氏の調査記録のなかに肥前石工銘リストの存在があった。その他、熊本県在住の石造物研究者である坂口雅柳氏の論考に「名工平川与四右衛門と高森」（肥後金石研究第10号）と題するものがあり、肥後地方にも与四右衛門の作品が伝わっていることが当時の文化財保護審議会委員であった玉浦祖神氏（永福寺住職）より教示された。こうした情報を整理した結果、まずどのような作品が存在するのか実際に目にし、記録しなければというのが審議会委員の意見であった。そこから、平川与四右衛門銘石仏を目指した長い探訪の旅が始まった。

まず、鹿島市～塩田町周辺から調査の旅を始めた。鹿島市幽照寺の地蔵菩薩半跏坐像を目のあたりにした時の鮮烈な印象は、忘れられない。調査に同行した審議会委員の誰もが「江戸時代元禄期の石仏とは信じられない」と口を揃えたほどに保存状態が良い傑作であった。それ以降、与四右衛門銘の石仏に出会うたびに作品の素晴らしいことに感動を飲むことになるのだが、幽照寺のケースはその最たるものであった。塩田町光桂寺の仁王像は、上下不均衡な体躯に加えてユーモラスな表情が造り出されており、非日本的な印象を与えた。

その後、中村氏の与四右衛門銘石仏リストに記載された場所を精力的に訪ねて歩いた。

唐津方面は、暑い夏の陽射しの中での調査であった。近松門左衛門所縁の近松寺の遼室禪師寿像を拝見させてもらった。祭壇より床に下ろして背中の銘文を拓本採取させてもらったが、わずか像高50cmほどの石像を大人2人がかりで運んで、足もとがふらついたことを覚えている。その足で小川島へ船で渡り、小川島観音堂を目指した。堂内に安置されていたのは聖観音坐像であり、部分的に彩色を施されていた。そのため、最初は木彫の仏像ではないかと疑ったほどである。

黒髪山の調査では山内町在住の郷土史家、浦川晟氏の案内で大智院跡に安置された地蔵坐像を調査した。この石仏は、それまでに見てきた与四右衛門の手による石仏とは一風変わった印象を受けた。腫れぼったい目やふくらした頬、胸元の首飾りなど、非日本的様相があったのである。

その他、多良岳の山頂に鎮座する太良岳神社の役行者像は、その険しい山道を登りながら「どのようにして石像を運んだのか」という疑問が頭を離れなかった。このことはまた、石造物の流通あるいは石工の行動に対する新たな課題を示唆することにもつながったのである。

佐賀県内の石仏調査に目途がついたところで熊本県内の探訪へと向かった。坂口雅柳氏の調査報告より、主に熊本市から植木町、合志町地域に分布していることが分かっていたが、実際に訪ねると地理感がないため、右往左往しながらの調査であった。植木町の西の原観音堂では、それまでの



写真6 県外の分布調査（靈巖院）

与四右衛門銘石仏とはまた雰囲気が違った柔らかい線を意識した彫刻の觀音像に巡り会うことができた。また合志町では、元々は六体地蔵像として制作されたと考えられる石仏のなかで4体が比較的近い町内に分散して安置されていた。

熊本市金峰山の麓近くに所在する雲巖寺には数多くの石仏が置かれていた。五百羅漢像が有名で、平川石工の手によるものだということが伝わっていた。そこで「平川与四右衛門」の名前を見つけることができればという期待をもって訪ねたが、五百羅漢そのものは時期的に後の作品であることが分かり、期待外れの感があった。ところが、奥には十六羅漢や釈迦三尊像が安置されており、その作風は「与四右衛門」的な秀逸さを漂わせていた。銘文のなかに石工名がないか探したが見つからなかった。ふと見ると「靈巖洞畔新口十六羅漢石像記」と題した石塔が建ててあり、そのなかに「平川与四右衛門」の名が刻まれているのを発見した。その時は、喜びもひとしおであった。

「肥前からこんな遠いところまでくるのか」と半信半疑だった場所が2カ所ある。ひとつは熊本県八代郡鏡町である。この印鑑神社の狛犬が与四右衛門作であることを肥後金石研究会の前川清一

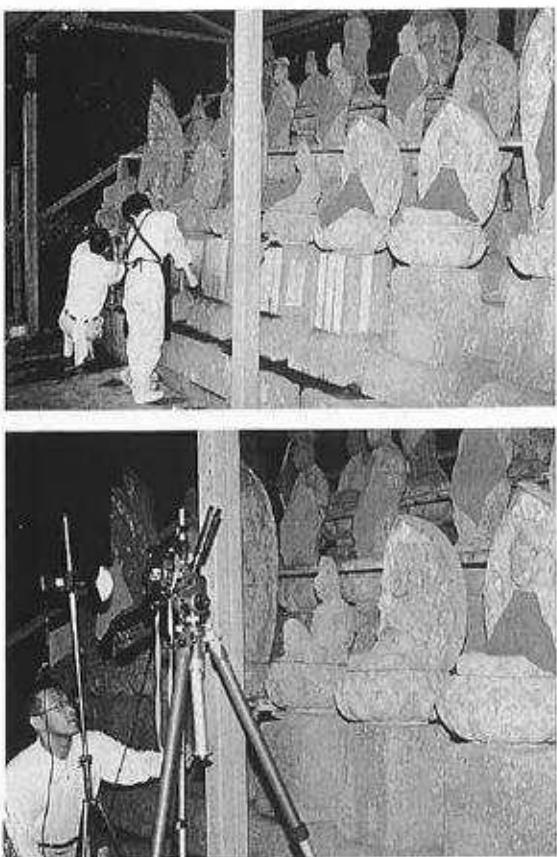


写真7 拓本採集・写真撮影作業。(空山観音堂)

氏の報告で知り、訪ねてみることにした。実際に見てみると、そこには非常に愛嬌のある表情の狛犬が対で置かれていた。この石像は江戸中期以降の猛々しい一般化した狛犬とは違ってオリジナリティーがあり、肥前狛犬の系譜を引くのではないかと思えたが、台座にくっきりと「与四右衛門」の名前が刻まれていた。

また、阿蘇郡久木野村では、羅漢寺跡の場所が分からず迷いに迷った。辿り着いた時は、夕方近くで洞窟に安置された石仏の写真を撮影するのがやっとであった。このように肥前から遠いところになると、際限がないような気がしてきてこれで調査を止めようと思ったほどである。

そこから高森町へと足を伸ばし、含藏寺の六体地蔵像を拝見した。この石像は銘文はないものの肥後の六地蔵に詳しい坂口雅柳氏は「与四右衛門の手によるものではないか」と私見を述べている。実際に目の当たりにして「与四右衛門様式」というものがあるとすれば、その範囲に入るものであるという感触を得た。

こうして、肥後地方の調査はひとまず終了した

が、佐賀県内及び肥後地方の調査を進めていくなかで最も大きな成果として挙げられるのは、竹下正博氏（佐賀県立博物館学芸員）の示唆を得ることことができたことである。

「平川与四右衛門の制作した石仏のなかには中国仏教の影響が見受けられる。そのルーツを探るとなれば、江戸時代に長崎に上陸した黄檗宗だろう。長崎市周辺を探ってみたら、与四右衛門の作品が残っているかも知れない。あるいは中国人仏師など、与四右衛門に影響を与えた人物がいた可能性もある」

当文化財保護審議会に竹下氏を招き、こうした示唆を受けた審議会委員は、直ちに長崎市周辺の寺院を巡り歩いた。そして、それまで予期していなかった成果を得ることになったのである。長崎市寺町周辺の寺院で、これまで見てきた与四右衛門の石仏によく似た石仏を多数発見し、与四右衛門銘石仏も3体確認できたのである。

また諫早市教育委員会からは、長崎市郊外（旧東長崎町）の靈巖院（滝の観音寺）に平川与四右衛門ら数人の砥川石工を招き觀音像数百体を奉納したという由来が残っていることが『重要文化財眼鏡橋移築修理工事報告書』（昭和36年、諫早市教育委員会発行）に記載されていると教示していただいた。早速、靈巖院を訪れたところ、長崎大水害により多くの觀音像が消失するなか、数十体の石仏が残されていた。そして、靈巖院奥の院には与四右衛門銘が刻まれた聖觀音坐像（脇持=善財童子と龍女像）が安置されていた。

これまで各地における調査の足跡を並べてきたが、こうして一応の調査を完了した。その後は調査データ・写真の整理を進めながら、補足調査を実施し、報告書作成までこぎつけたところである。

補足調査のなかで特筆すべきは、砥川石工集団が拠点とした牛津町谷集落の山麓に所在し、平川与四右衛門の墓碑がある常福寺において、これまで確認されていなかった位牌を発見したことであろう。この位牌は多久家関連の位牌所に紛れて置かれていた。この位牌の発見により、平川与四右衛門という人物像を検討するうえで重要な視点が提示されることになった。

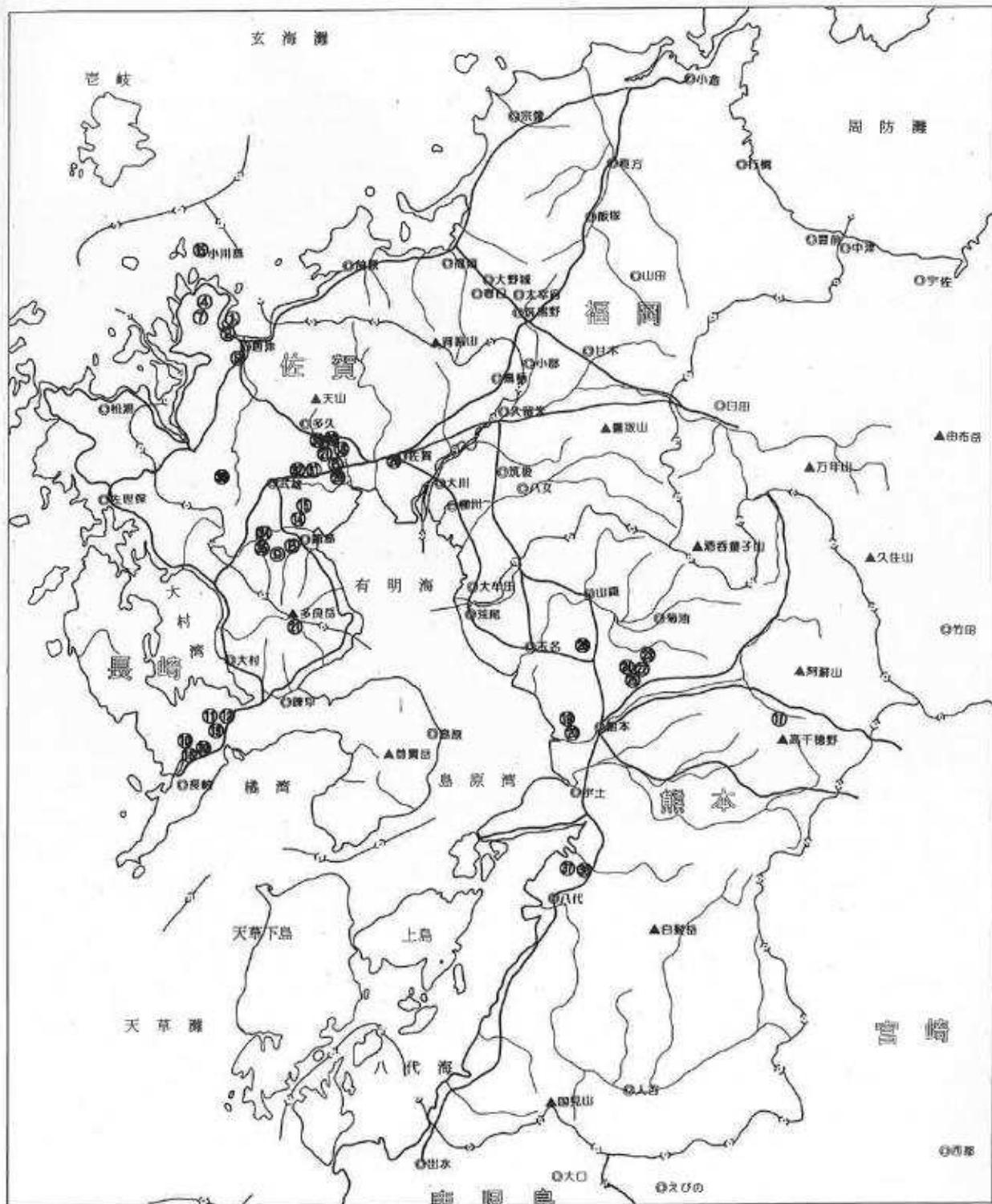
#### V. 調査記録

調査データは、主に完成時期を記すとみられる銘文中の紀年銘により、時期が明確なものとそうでない時期不明のものに大別した。

まず、時期が明確なものについては、年代の古い方から並べて解説していく。従って、同じ場所

に安置された石仏であっても、紀年銘に違いがあれば一連の解説とならない。

時期不明の与四右衛門銘石仏については、任意に並べて説明を行う。また、銘文については不明文字は□で表わしている。



## 平川与四右衛門銘石仏リスト

(データ:牛津町文化財保護審議会石仏分布調査成績による)

番号	西暦	制作・勧請時期	物件の種類	所在地	石工 錄文 内容	備考
1	1687	貞享四年丁卯十一月吉祥日	聖観音立像	唐津市銀崎幡現	佐賀領戸川村平川与四右衛門作之	「門」を崩して刻む。
2	1687	貞享四年丁卯十一月吉祥日	地蔵立像	◆	◆	「門」を崩して刻む。
3	1688	元禄元戌辰月	達室禪師寿像	唐津市近松寺	石工肥前戸川住平川与四右衛門作	背面に銘文あり。
4	1689	元禄二年己巳天二月吉祥日	地蔵立像	鎮西町洞清寺	肥前戸河住平川与四右衛門	背面下部に銘を入れる。
5	1689	元禄二年己巳年八月吉祥日	觀音坐像	呼子町小川島	作者肥前戸川住人平川与四右衛門	六形の塔部に銘文あり。
6	1691	元禄四年辛未天正月廿六日	布袋坐像	牛津町熊野惣現社	石工平川與四右衛門	台座に銘文。
7	1693	元禄六年	聖観音立像	鎮西町良縁寺	肥前戸川村平川与四右衛門	背面下部に銘を入れる。
8	1696	元禄第九丙子春三月八日	地藏半跏坐像	鹿島市幽照寺	祇川住平川与四右衛門之作	塔に銘文。保存状態良好。
9	1696	元禄九歳次丙子十二月吉良日	地蔵立像	鹿島市浅浦道雀墓地	石工平河與四右衛門尉作焉	三界万靈塔。塔部に銘文。
10	1699	元禄十有二歳己卯六月	地藏半跏坐像	長崎市福濟寺	肥前戸川之住平河與四右衛門尉作	塔に銘文あり。彩色する。
11	1699	元禄十二年己卯六月廿八日	聖觀音坐像	長崎市靈巖院	肥前戸川   石匠平川与四右衛門信照	脇侍として龍女・善財2体
12		◆	龍女像	◆		石工銘なし。
13		◆	善財童子像	◆		
14	1702	元禄十五壬午年	地藏半跏坐像	有明町福泉寺	佛工平川與四右衛門	背全面に銘文あり。
15	1702	元禄十五年歲住壬午卯春吉	地蔵立像	有明町総佐神社	祇川住平川與四右衛門尉信輝作之	台座に銘文。
16	1706	寶永三年丙戌三月吉祥日	地藏半跏坐像	長崎市總慶寺	佛工肥前州祇川平川与四右衛門	右首が破損。
17	1707	寶永四年丁亥十一月吉日	觀音如來坐像	久木野村羅漢寺跡	肥前戸川村住佛師平川与四右衛門	背面に銘文。
18	1708	寶永五年午閏正月吉陽日	千手觀音坐像	牛津町谷公民館	石工師平川与四右衛門信照	光裏面に銘文あり。
19	1708	寶永五次戊子十一月	觀音如來坐像	端本市雲巖寺	石工平川与四右衛門 平川市五郎	「雲巖御碑新鑄 十六羅漢石像記」と題する石碑に銘文あり。
20	1708	寶永五次戊子十一月	十六羅漢像	◆	◆	
21	1712	正徳二壬辰天十二月吉日	役行者	太良町多良岳神社	延川石佛師平川与四右衛門	台座に銘文あり。
22	1727	享保十二丁未天	六体地蔵①	(熊本県)合志町竹浪塚町	肥前小城郡祇川住石工平川與四右門	「衛」が抜けている。
23	1727	享保十二丁未天四月吉日	六体地蔵③	◆ 合志町竹浪塚町	肥前國小城郡祇川住石工平川與四右衛門	「右」が抜けている。
24			六体地蔵③	◆ 合志町竹浪塚町		銘文はないが、一連の作品と考えられる。
25			六体地蔵④	◆ 合志町竹浪塚町		
26	1732	享保十七壬子天十一月吉祥日	聖觀音立像	熊本県綾木町西の原	肥前小城郡祇川石工平川与四右衛門	銘文は案内板による。
27	1736	享保廿一丙辰天二月吉日	如意輪觀音 半跏坐像	牛津町常福寺	願主平川氏與四右衛門尉	竿石は円筒形。
28	1736	享保二十一年丙辰三月念 四日安産	地藏半跏坐像	牛津町永福寺	石工平川與四右衛門	竿石は円筒形。
29	1752	寶曆二年壬申九月四日	地蔵立像	佐賀市多布施	祇川石工平川与四右衛門	三界万靈塔。
30	1753	寶曆三癸酉二月吉日	千手觀音立像	牛津町長勝寺	石工平川与四右衛門	船形光背裏に銘を入れる。
31	1754	寶曆四年甲戌二月吉祥日	觀音坐像	江北町天子社	石工祇川谷村平川與四右衛門	頭部欠損。一石一字法華塔
32	1759	寶曆九己卯年六月廿四日	六体地蔵	大町長徳寺	石工祇川谷村平川与四右衛門	地蔵像は破損。台座に有銘
33		<制作時期不明>	聖觀音立像	牛津町長勝寺	石工平河與四右衛門	船形光背裏に銘。
34		◆	仁王像(阿吽)	塙町光桂寺	小城郡祇川住石工平川與四右衛門	背面下部に石工銘のみ。
35		◆	地蔵坐像	伊万里市黒髪山	戸川谷村平川與四右衛門尉	蓮華座に銘文。
36		◆	狛犬(阿吽)	熊本県鏡町印鑑神社	石工肥前戸川村平川与四右衛門	台座に銘文。
37		◆	如意輪觀音	長崎市皓臺寺	肥前戸川之住平河與四右衛門作	舟形光背裏側面に銘文。
38						
39						

## (1) 黒崎権現（唐津市）

【概要】黒崎権現は唐津市佐志浜町から佐志小学校前を通り、相賀の浜海水浴場に至る途中右手の独立丘陵上の黒崎山に鎮座する。

この社創建の由来は南北朝時代に遡り、修験の地として全国にその名を知られた英彦山から訪れた修験者が坊を開いて権現を祀ったことから始まるとされる。江戸時代は神仏混濁により、仏教的色彩が強くなったと考えられるが、明治政府の廢仏棄釈により神道が強調され、「黒崎神社」と呼ばれるようになったという。

入口から急だがそう長くない石段があり、それ



位置図

を登りきった頂部付近に3体の石仏が安置されている。向かって右側から弁財天坐像、地蔵菩薩立像、聖観音菩薩立像である。

### 1. 聖観音菩薩立像

直方体の台座に蓮華座を置き、その上に仏像を安置する。観音像は右手に蓮華が入る水瓶を持ち、左手は与願印を結ぶ。体躯はほぼ正対しており、屈曲部位は見当たらぬ。

彫刻技術をみると、頭部正面の宝冠の中には化仏を刻み、髪は一本一本を表現して精巧。裳・衣を身につけるが、その表現は流麗である。胸元部

分に裳の上端部が表現されている。頬を細くした端正な顔立ちで、首には三条の皺（三道）を作る。台座には正面及び両側面に銘文が刻まれているが、平川与四右衛門の「衛門」が崩し字になってい



写真8



写真9



写真10

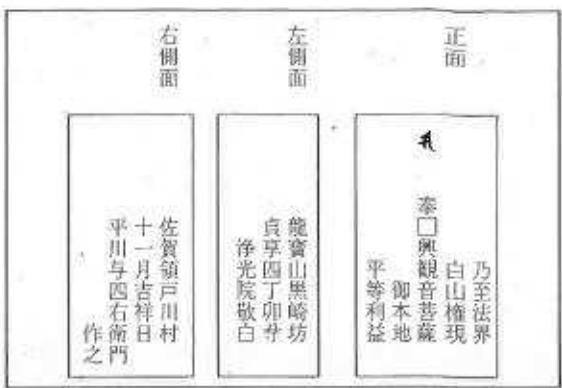
## 2. 地蔵菩薩立像

聖観音像と同様に直方体の上に蓮華座を置き、その上に安置される。蓮華座が聖観音像のものよりも若干高い。

右手は錫杖、左手には宝珠を持つ一般的な地蔵像である。錫杖そのものは欠失している。像には破損がないが、残念ながら全体を苔が覆う。



写真11

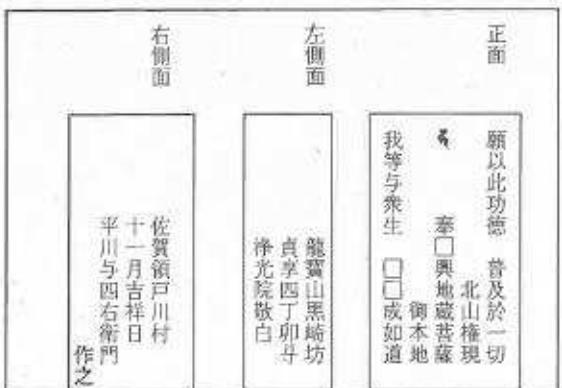


銘文①

衣の表現は、彫りが深く写実的である。側面からみると、腹部を前に膨らませて、量感を出す。顔は聖観音像と同様にやや額を細くした端正な顔立ちに仕上げている。銘文は聖観音像と同様で、正面の内容が異なる。偈文は法華経化城諭品。



写真12



銘文②

## (2)瑞鳳山・近松寺（唐津市）

【概要】唐津市内の西寺町に所在する臨済宗南禅寺派寺院である。開山は湖心硯鼎和尚で、天文年間（1532～1555）に創建されたと伝えられる。享禄4年（1531）銘の額が入る湖心硯鼎像が当寺に残されている。

中興開山は耳峯玄熊和尚で、その時の開基が当時の領主である寺沢広高である。当寺には寺沢藩二代目当主、寺沢堅高の墓所や近世淨瑠璃の作者として名高い近松門左衛門の墓石などもある。



位置図

### 3. 遠室禪師寿像

寺沢堅高が正保元年に起きた黒船焼討ち事件などの後、正保4年（1648）に江戸で自殺すると、近松寺は後見人を失って荒廃する。

その後、寺の危機を救ったのが第四代住職となる遠室禪師である。遠室は徳川家光に請い御朱印を賜るなどして寺の再興を実現する。石造の寿像の背面には、その威徳を忘れないように元禄元年（1688）にこの像を作りて祀ることにしたと伝える。

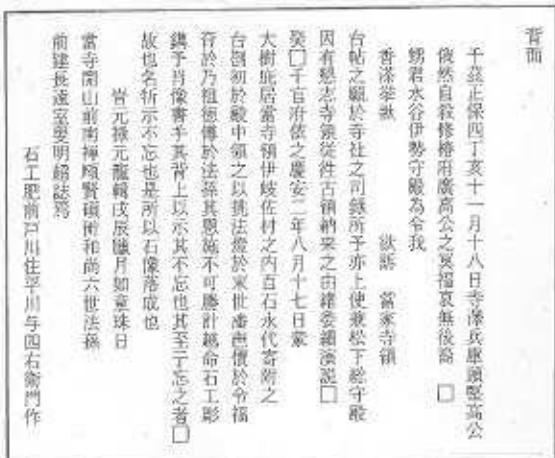
寿像は平川与四右衛門銘石像のなかで、この作品1点である。写実的な彫刻で表現している。像全体は、顔料が塗付されていたと考えられるが、現在は剥げ落ちた状態である。



写真13



写真14

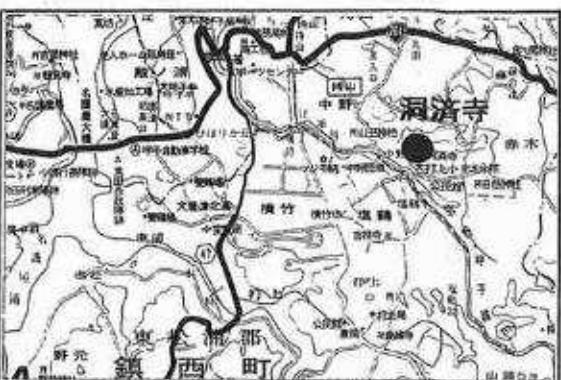


銘文③

### (3)大儀山・洞済寺(佐賀県鎮西町)

【概要】唐津市から呼子町へと向かう県道204号線を七つ釜入口を過ぎたあたりから左へ折れ、赤木分校を目指していくと、学校のすぐそばに所在するのが臨済宗南禅寺派の洞済寺である。

永正年間(1504～1521)に洞叟禪師が創建したと伝えられている。石門を通り階段を上ると山門である。その山門から境内に入った左手に石仏が安置されている。



位置図

#### 4. 地蔵菩薩立像

右手に錫杖、左手に宝珠を持つ地蔵菩薩立像である。残念ながら、右手首から先が欠失している。



写真15

唐津黒崎権現の地蔵像と比べるとやや額に膨らみがある。また、裳上端部の表現に違いがみられるものの、その他については大差はない。像背面衣下半部に銘文を刻む。



写真16



銘文④

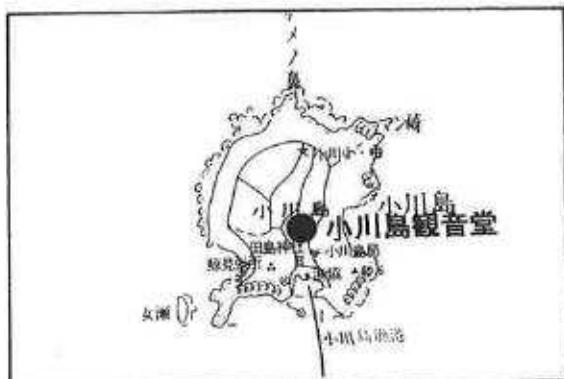


写真17

## (4) 小川島觀音堂(佐賀県呼子町)

【概要】呼子港から渡船で約20分、小川島に着く。港の正面には、鯨の豊漁を祈願した田島神社が鎮座するが、その脇から山の中腹に向かって延びる狭い路地を上っていくと右手に觀音堂がある。

松浦拾風土記には「大久保加賀守忠職のころ、鯨とり諸方より集まり来る」とある。忠職の就任期間（1649年～1670年）である江戸前期には、すでに小川島が捕鯨の拠点だったことが分かる。



位置図

### 5. 聖觀音菩薩坐像

六角形の塔の上に蓮華座を置き、その上に聖觀音菩薩坐像が安置されるものである。結跏趺坐で手は法界定印を結ぶ。顔部はやや頬にむけて細くなり、端正な顔だちにつくる。宝冠の中に立ち姿の化仏を彫り込み、衣は流麗かつ繊細な表現を施す。ノミが深く、木彫仏を見るようである。裳の上端部は折り返しをつけている。与四右衛門銘石仏のなかでは他に例のない表現である。

蓮華座及び仏像は、赤及び濃紺の顔料で彩色を施されている。当初からのものかどうか不明。蓮華は濃紺で縁取りを行い中を赤色で塗る。また觀音像は主に上半部の頭部及び衣部分を濃紺色、縁を赤色で塗り分ける。



写真18



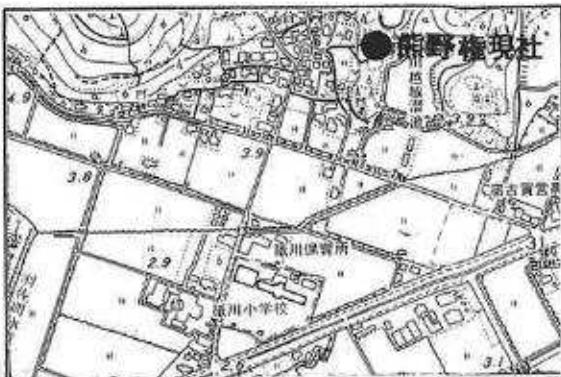
写真19

六角形台座 (左回り) 1面	常寂院青山淨樂居士
二界萬葉十方至聖 2面	光林妙清優女士
3面	心安宗栄玄妙金榮玄 妙空信士
4面	心月妙尊妙清
5面	心月宗安道達
6面	芳雲宗全居士

銘文⑤

## (5)熊野権現社(佐賀県牛津町)

【概要】牛津町上砥川の谷は、砥川石工の拠点集落であった。その北側の小高い丘陵上に熊野権現社がある。開山は後藤遊仙。遊仙は多久家第2代藩主多久茂辰の叔父に当たり熊野山、羽黒山、英彦山に入峰修業した。島原の乱(寛永14年=1637)の際、茂辰は武運を願って熊野権現に願をかけさせ、無事帰陣した。そこで、権現を勧請し、社殿を建立したと伝えられる。



位置図

### 6. 布袋像

与四右衛門銘石像のなかで、布袋像はこの1点のみである。また、石仏分布調査のなかでこの形式の布袋像は確認されていない。

この布袋は右足を立てる半跏坐で、右手は右膝の上に置き、左手は左膝付近に手の平を上に向ける。背中には袋を背負い、上体は後ろに反らしがみにつくる。顔はやや下膨れのふくよかな顔で大きな耳朶をもつ。円満な笑みを彫り出し、表情豊かな彫像である。

台座は長方体の石を2枚並べ、前面に銘を刻んでいる。銘文中の「大越家 殷盛」は、遊仙の実子で、当熊野権現の坊跡を継いだとされる。



写真21



写真20



写真22



銘文(6)

## (6)錦成山・良縁寺(佐賀県鎮西町)

【概要】鎮西町赤木の洞済寺から横竹方面へ向かい、郵便局前四ツ角を左に折れ打上公民館を過ぎたあたりに臨済宗南禅寺派の錦成山良縁寺がある。

この寺院の由来等詳細は不明だが、鎮西町史によると、打上村大庄屋坂口家保存の旧記に文亀元年(1501)に耳峰大禪師を開山として創建されたこと、及び本尊の勸世音菩薩像が坂口家祖先の坂口長門の勧請によるものという記録がある。



位置図

### 7. 聖観音菩薩立像

本像は右手に蓮華を差した水瓶を持ち、左手は与願印を結ぶ。首部より頭部が折れ、モルタルにより接合されている。頭上は宝冠の中に化仏を彫るものではなく、宝冠台のような帶を表現するにとどまる。石工名は本像の背面に刻まれている。



写真23



写真24



銘文⑦



写真25

## (7)慈雲山・幽照寺(鹿島市)

【概要】鹿島市中心街を通る国道207号から左に折れ、裁判所裏の丘に所在する曹洞宗禪寺である。

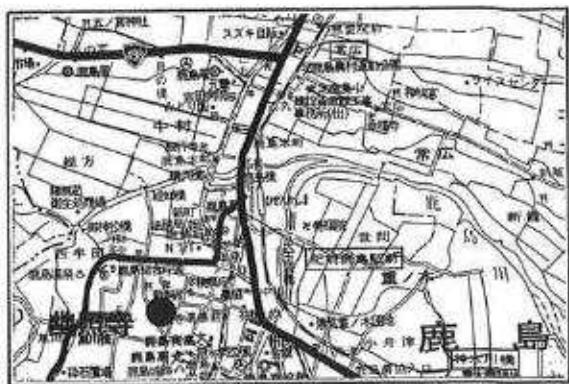
そもそも幽照寺は、正徳元年（1711）に鹿島藩主直朝の第三子である文丸夭折のため、母祐徳院がその菩提を弔うため浜町に創建した寺である。現在地には当時、浜町の泰智寺に属する地蔵庵があったが、昭和8年に荒廃し消滅状態であった幽照寺の寺号を継承して改称した。

### 8. 地蔵菩薩半跏坐像

円形の基部に反花をつくり、隅丸直方体の台座と蓮華座を組合せた上に仏像を安置する。



写真26



位置図

像高112cm。右手は錫杖、左手は宝珠を持つ半跏坐像。額は頬をやや膨らませ、耳朶が長い。額中央の白毫及び左手の宝珠は赤色顔料を塗り、眉、瞼、眼、髭は墨で描く。衣や裳の表現は彫りが深く流麗で、爪の先の表現に至るまで精巧。ほとんど損傷摩滅がなく、制作当時の状況を今に伝える。平成9年、鹿島市重要文化財に指定されている。

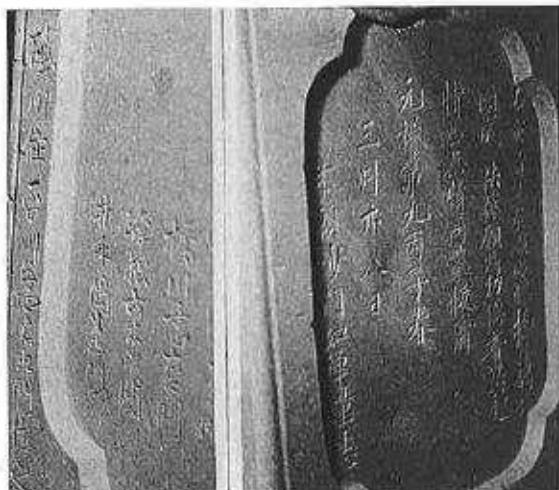
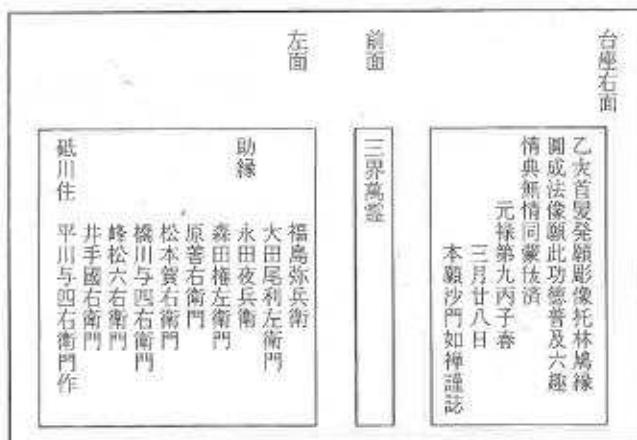


写真27



銘文⑧

## (8) 浅浦道雀墓地(鹿島市)

【概要】JR鹿島駅から塩田町方面へ延びる県道を進むと、浅浦入口の三叉路がある。そこから左に折れてしばらく行くと、能古見小学校浅浦分校が右手に見えてくる。その手前左手の小高い丘に浅浦道雀墓地がある。

この墓地は、上浅浦の元光寺の管理地であるが、その詳細については不明。平川与四右衛門銘石仏は墓地の入口に安置されている。



位置図

## 9. 地蔵菩薩立像

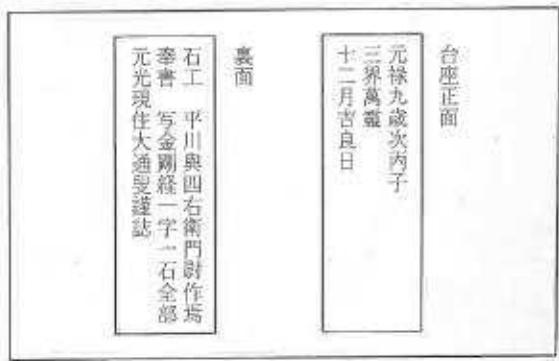
この石仏は立像で幽照寺の地蔵像は半跏坐像という違いはあるものの、右手に錫杖、左手に宝珠を持つ形態は変わらない。また、制作年が同じ元禄9年(1696)で、幽照寺のものと同様に三界万靈塔上に安置される。長く野外に置かれていたため、苔が全体を覆い、保存状態は良くないが、彫刻そのものは非常に彫りが深く秀逸である。衣、裳及び顔部等の表現についても幽照寺の地蔵像とよく似ており、技術の高さを發揮した作品である。平成9年、鹿島市重要文化財に指定。



写真29



写真28



銘文⑨

## (9) 分紫山・福濟寺（長崎市）

【概要】長崎市筑後町の分紫山・福濟寺は山斜面に見える巨大な観音菩薩立像で有名。黄檗宗で、寛永5年(1628)に中国僧、覺悔禪師によって創建された。堂宇は明朝様式の建造物で、昭和2年には国宝に指定されたが、昭和20年の原爆投下により、全てが消失している。幸いにして平川与四右衛門銘の地蔵菩薩半跏坐像は難を逃れ、参道入口付近の小さなお堂に安置されている。



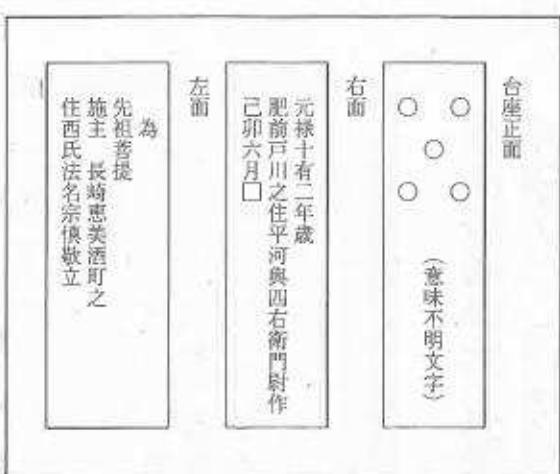
位置図

## 10. 地蔵菩薩半跏坐像

右手に錫杖、左手に宝珠を持つ地蔵菩薩半跏坐像で、本体全体に彩色が施されている。衣及び裳は赤色。顔部から胸及び手足は青白色の顔料が塗られている。像高約120cm。これまでの地蔵像とは若干雰囲気が異なる。顔の頬をやや細くし瞼を腫れぼったく表現している。柔らかい衣など、繊細な表現がなされ精巧な彫刻技術である。また宝珠は頂部を尖らせることなく丸く作る。台座正面の銘文は火炎に見立てデザイン化したものだろうか。



写真30



銘文⑩



写真31

## (10)長滝山・靈巖院（長崎市）

【概要】長崎自動車道多良見で国道34号に乗り換えて長崎市街方面へ向い、平間町観音入口の三叉路を右に折れ、間ノ瀬川に沿って山道を進むと、滝の観音寺（靈巖院）が左側に見えてくる。

この寺は黄檗宗で、唐様の觀音堂は長崎県指定重要文化財である。開山は木庵禪師の法嗣とされる唐僧、鐵巖和尚。境内には觀音像を初めとする石仏が多数安置される。



位置図

## 11. 聖觀音菩薩坐像

当寺奥の院は、鐵巖和尚の小庵梵住山玄津院があった場所で、そこに三体の石仏が安置される。三体ともに苔及び風化の影響をかなり受けており、石の劣化が進んでいる。聖觀音菩薩坐像は、宝冠を高く作る。全体的に彫りが深く、精巧である。



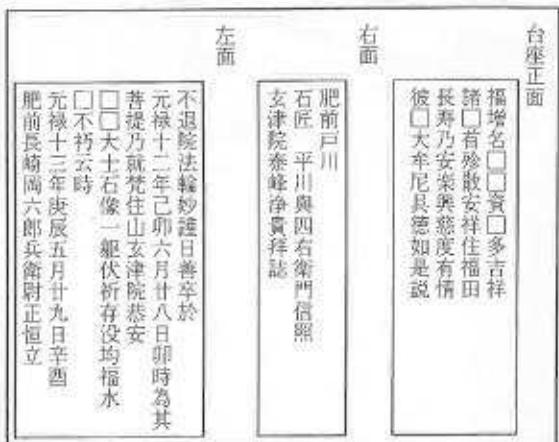
写真32



写真33



写真34



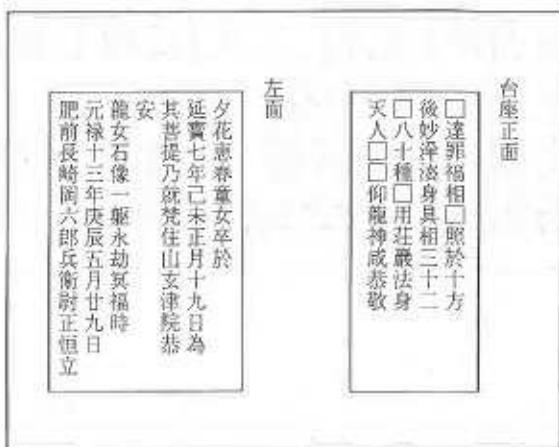
銘文⑪

## 12. 龍女像



写真35

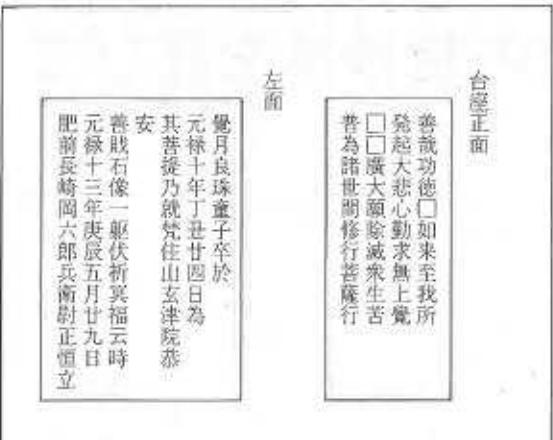
モチーフとしては、非常に珍しい。本像を龍女像と断定するだけの見識がなく、台座に刻まれた銘文でようやく分かることといった方が正しい。聖観音菩薩坐像の脇侍として安置されている。他の石像同様に苔に覆われ、石材の劣化が激しい。本像は、両手で胸の前に鉢を持つ立像で、前面下半部は整形面が大きく剥離しており、彫刻跡は不明。顔も明瞭ではなく、わずかに目鼻立が分かる程度である。



銘文⑫

## 13. 善財童子像

普知識の人である觀音に参詣する文殊菩薩の従者、善財童子の石像であろう。両手首より先は欠失しているが、合掌手であると考えられる。他の像に比べると保存状況は良いが、石質の劣化は進んでいる。銘文によると、これらの石像は元禄13年（1700）に岡六郎兵衛という人物が亡くなつた3名の菩提を弔うために作ったものである。



銘文⑬



写真36

## (11) 飯盛山・福泉寺(佐賀県有明町)

**【概要】** 国道207号線有明町廻里津の交差点を西に折れていくと稻佐山に突き当たる。その裾野を南に回っていくと小さな溜池を過ぎたあたりに臨済宗東福寺派の名刹、福泉寺がある。この寺はその昔は真言宗寺院で、弘法大師が開いたとされる靈場稻佐山に鎮座する稻佐神社の別当職にあった。その後、鎌倉第五代執権北条時頼を開基として、鉄牛円心により禪寺に改められたと伝えられる。



位置図

## 14. 地蔵菩薩半跏坐像

平川与四右衛門銘の地蔵像は、境内地に小さなお堂を建てて祀られている。蓮華座の上に右足を半跏趺坐し、左足を垂下している。右手に錫杖、左手に宝珠という形態は他の地蔵像と変わらないが、宝珠を持つ手の位置は若干違っており、本像は胸のあたりまで抱え上げるようにつくる。全体的に苔がついており、顔部の表情などは分かりにくいけれど、衣はノミが深く、かつ柔らかい布の表現を追求している。

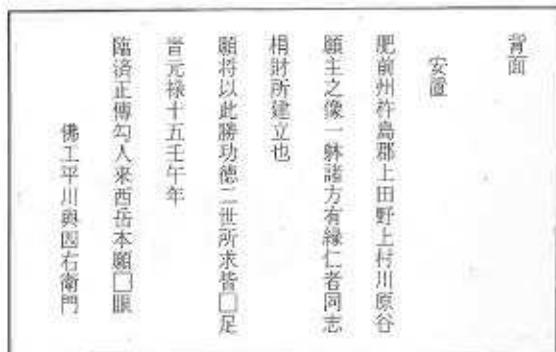
銘文は、仏像の背面に刻まれる。そのなかで特徴的なことは、本像に初めて「佛工」という表現が登場することである。



写真38



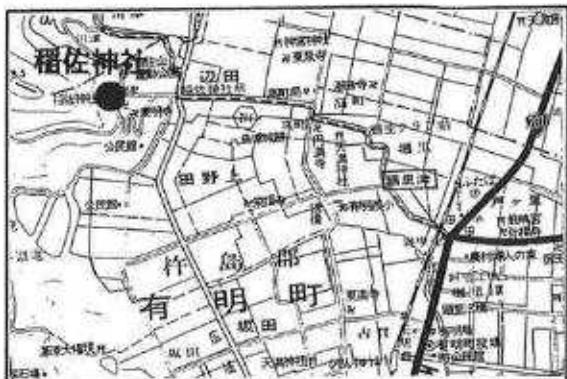
写真37



銘文⑭

(12) 稲佐神社（佐賀県有明町）

**【概要】** 稲佐神社は、有明町西方に位置する稲佐山に鎮座する。弘法大師が開いた靈場と伝えられるこの山には、隆盛を極めた頃は16の寺院が建てられ、稲佐山泰平寺と総称された。戦乱などによりその大半が焼失し、現在は神社として神殿や鐘楼堂などが残っているに過ぎない。参道は長い石段で肥前鳥居が奉獻されているが、そのなかには佐智恩内最古の天正13年(1585)銘肥前鳥居がある。



位置圖

### 15. 地藏菩薩立像

参道の石段途中から左に入ると遍照殿がある。その境内奥のお堂に地蔵菩薩立像が安置される。本像は像高160cmを測る。その下に蓮華座、方形台座、反花、基部があり、全高は3mを超える。右手に錫杖、左手に宝珠を持つ地蔵像で足先が若



写真39

干欠損している。全体的に苔がつくが保存状態は良好。顔部はやや磨滅しており表情は分からない。浅浦墓地の地蔵像と比べるとやや彫りが浅い。



写真40

右面	左面	裏面
肥遜居□沈浮○道○蓮邦 寵辱不驚□莫所貪○際法均風雨 旋邊聚快□莫所羨○國際均風雨 慈在此尊馴○醫云為○歷三春 功○醫日○玉泉主	口腹之資□莫所羨○際法均風雨 口○醫日○玉泉主	專念佛端心谷者○頓悟宿 口○醫日○玉泉主
助功 玉泉主權大僧都澄音法印	素願	口○醫日○玉泉主
福田村產專念佛石心谷		口○醫日○玉泉主
銘曰 信織萬法無所唐○體確突出 現李悅姿平常心致甚○雲祇紙 且道追懷欵絕指靈悲體莫解 聖眸明慈功在挫詭應化機宜 告		口○醫日○玉泉主
元祐十五年歲在壬午季春吉 龍華乞士寧鉉題		口○醫日○玉泉主

銘文⑯

## (13) 海雲山・皓臺寺（長崎市）

【概要】長崎市寺町に所在する皓臺寺は曹洞宗寺院で、現在では専門僧堂となっている。慶長13年（1608）、肥前国松浦郡山口村（現佐世保市）の洪徳寺七世であった龜翁良鶴により創建された。その後、玉林寺（佐賀県大和町）持住であり、多久の円通寺の十五世であった一庭融頓和尚が法席を譲られて皓臺寺二世となっている。一庭は長崎光雲寺、永昌寺、高林寺を開き、皓臺寺の末寺とした。



位置図

### 16. 地蔵菩薩半跏坐像

皓臺寺の総門「勒額門」を過ぎた右手に石仏群が安置されているが、そのなかの一つに平川与四右衛門銘が刻まれる。六角形の塔部の上に蓮華座を置き、その上に地蔵菩薩が安置されるもので、全体を苔が覆う。像高は95cmを測る。像形は他の半跏坐像と同様であるが、右手首から先が欠失している。顔は下頬を丸く膨らませ、眼・眉をやや切れ長につくり、端正な顔立ちである。



写真41



写真42



写真43

1面(前面)	2面	3面	4面(背面)	5面	6面
六角台座					
大乘法華經全焉一字一石一拜書□落	書寫者前州蘿宗	佛工肥前州氣用平川与四右衛門	(なし)	宝永三年丙戌三月吉祥日建施	願主本五鷗町森儀石衛門

銘文⑩

## (14) 羅漢寺跡(熊本県久木野村)

【概要】熊本県阿蘇山の南側を回り込むように走る国道325線を高森町方面へ進む。長陽村河陽を過ぎて右に折れ、しばらく直進すると久木野中学校がある。その横から右に入り、山道を行くと羅漢寺跡の標識がある。そこで車を下りて徒步で約20分ほど小さな道を登ると、羅漢岩の中腹ほどに洞窟があり、その中に釈迦如来坐像と十六羅漢像が安置されている。



位置図

## 17. 釈迦如来坐像

その昔、羅漢寺の本尊として祀られていた木造釈迦如来像のかわりに石像を作って奉納したと伝えられる。像高57cmを測る。反花の基部に蓮華座を重ね、その上に仏像を安置する。洞窟内に置かれているためほとんど風化を受けず、制作当時の状況を今に伝える。本像と十六羅漢は、熊本市の雲巖寺のそれと非常によく似ている。制作時期も1年の違いで、一連の制作である可能性もある。



写真44



写真45



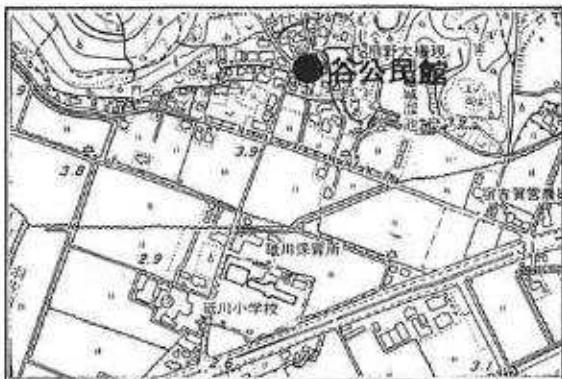
銘文⑪



写真46

## (15) 谷公民館（佐賀県牛津町）

【概要】牛津町を東西に横断する国道34号を武雄市方面へ進むと、砥川小学校が右手に見え、その前の交差点を右に折れて直進すると山裾に突き当たる。この付近は谷底平野の地形をなし、肥前砥川石工の拠点となった谷集落である。道は集落の中央付近で二股に分かれるが、その右手に谷公民館がある。その敷地の奥まった場所に小さなお堂が建てられ、千手観音菩薩坐像が安置されている。



位置図

## 18. 千手観音菩薩坐像

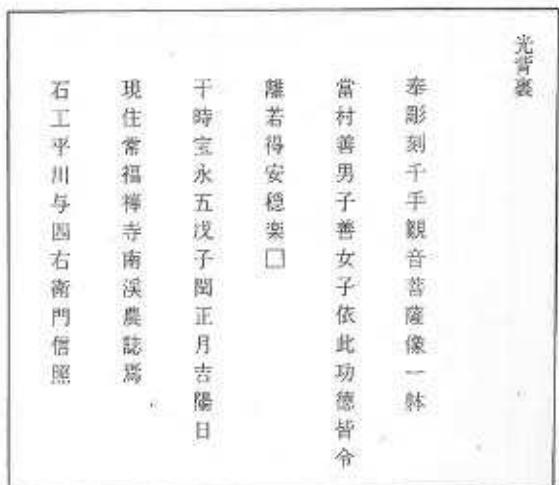
本像は船形光背を有する千手観音像で、本仏と光背を一材から彫り出した秀作である。光背の高さは82cmを測る。蓮華座の上に結跏趺坐した一面十二臂の形状を呈している。体の正面には合掌手を彫り、下腹部付近には宝鉢を持つ手をつくる。残念ながら、合掌手は手首から先が欠失。光背には、八臂をレリーフ状に彫り出している。いずれもノミが深く精巧である。顔はやや摩滅しているが、頭部の宝冠には立ち姿の化仏を彫り、髪は一本一本を細かく表現する。光背の裏面に銘文を刻む。



写真47



写真48



銘文⑩

## (16) 宝華山・雲巖寺（熊本市）

【概要】曹洞宗寺院雲巖寺は、熊本市街から東方に位置する金峰山を北側から回り込むように県道を進んでいき、市街からみると金峰山の裏手に位置する岩戸に所在する。江戸時代の剣豪、宮本武蔵が参籠して「五輪書」を書き始めた雲巖洞があることで有名。またこの寺には、測田屋儀平が安永8年(1779)から発願し、24年かけて完成させた砥川石工の手による五百羅漢が安置されている。



位置図

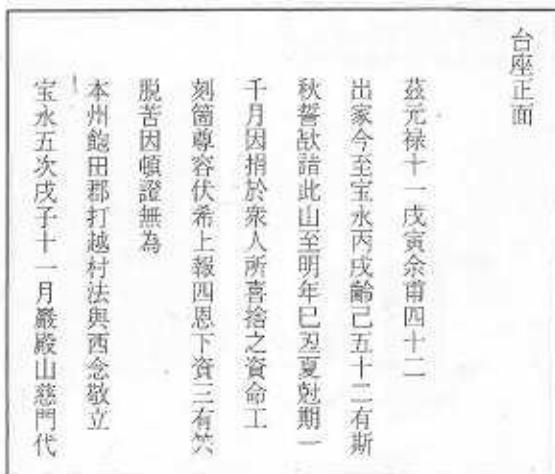
### 19. 釈迦如来坐像（三尊）

中央に釈迦如来坐像、左右に文殊菩薩、普賢菩薩坐像を安置したものであるが、釈迦如来坐像に比べて他二菩薩の保存状況が悪い。向かって右側が青獅子に乗る文殊菩薩であろうか。

本像は像高90cmを測る釈迦像。直方体の台座の上に蓮華座を置き、仏像を安置する。結跏趺坐して禪定印を結ぶ。顔部は顎をやや細くし、眼はやや切れ長で上げ気味に彫る。ノミは深くて丁寧かつ精巧な彫刻である。



写真49



銘文⑩



写真50

## 20. 十六羅漢像

釈迦三尊像の周辺には十六羅漢像が置かれている。この十六羅漢については、「靈巖洞畔新鑄十六羅漢石像記」と題した石碑が建立されており、そのなかに「平川与四右衛門」及び「平川市五郎」という石工の名前が記されている。

十六羅漢は釈迦如来の眷属とされ、正法護持を誓った十六人の羅漢のことを指す。十六人の羅漢のなかで第一尊者とされる「びんずる尊者」は民間信仰が篤く、単独で作られることもある。

雲巖寺の十六羅漢像は宝永年間、龍海慈門和尚がその造立を思い立ち、まずそのうちの一体の制作を石工に依頼した。そのことが世間に広まり、寄進を申し出る人が次々あって、宝永5年(1708)に完成したと伝えられている。羅漢は後年に制作された五百羅漢と比べると一回り大きく、像高80-90cmを測る。それぞれの顔の表情が豊かで、細かい部分まで精巧に彫刻されている。仏像に比べて人間的な表現を試みたのではないかと推察される。



写真51

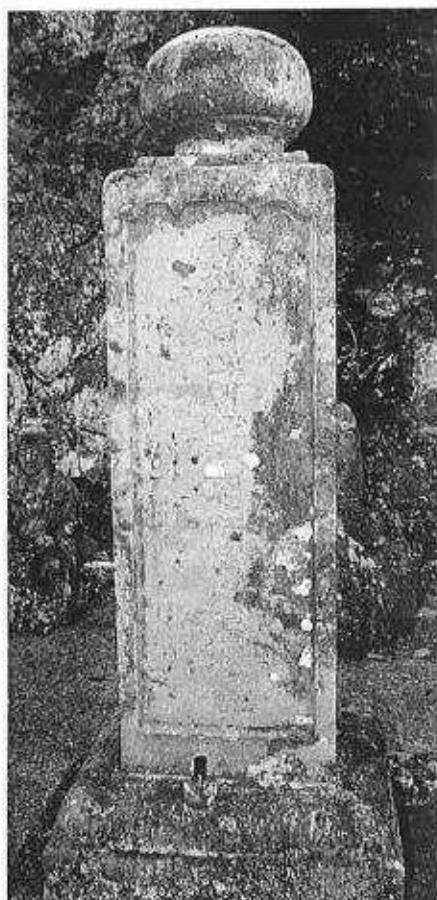
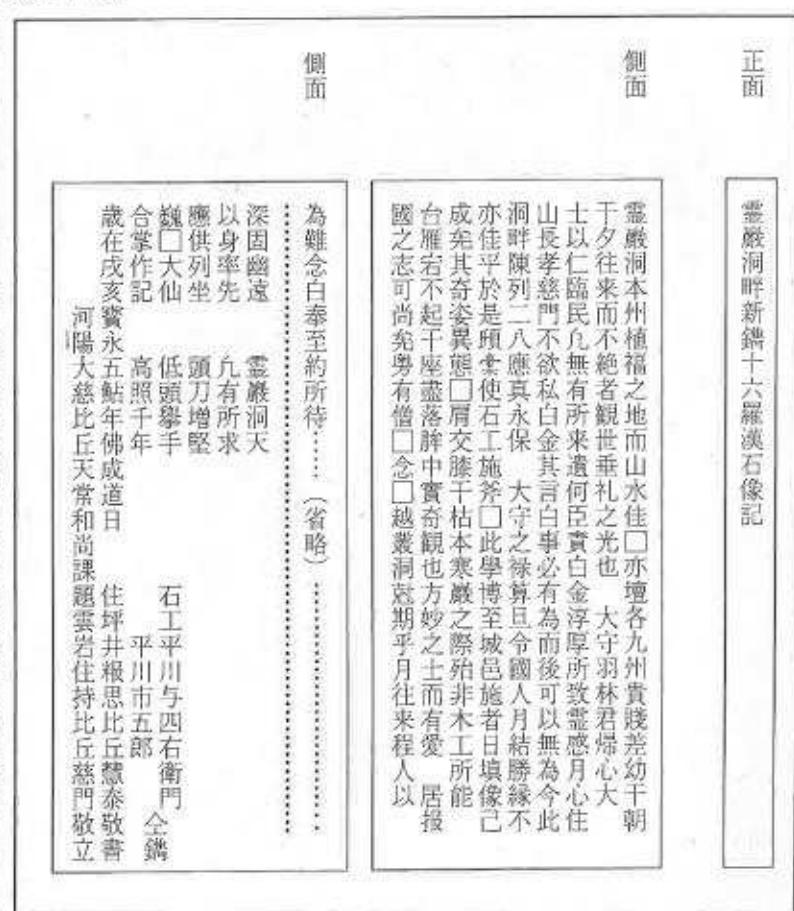


写真52



銘文⑩



写真53



写真54



写真55



写真56

## (17)多良岳神社(佐賀県太良町)

【概要】国道207号線を諫早市方面へ向かいJR太良駅前から西へ進むと、その昔は修験の地とされてきた多良岳へと至る。途中、車を下りて徒步による登山が余儀なくされるが、約1時間程度で山頂に着く。山頂付近は県境で、所在する金泉寺は長崎県高来町、多良岳神社は佐賀県太良町となる。この山頂に鎮座する多良岳神社の参道入口に置かれているのが、平川与四右衛門銘石像である。



位置図

### 21. 役行者像

役行者は奈良～平安時代にかけて生駒山や熊野山で修行を行い、壹験を得た修験道の開祖とされる人物で、正式名は役小角。本像は僧衣をまとい、頭巾を被る。顎には鬚をはやす。右手は手首から先が欠失。錫杖を持つとみられる。左手は経巻を

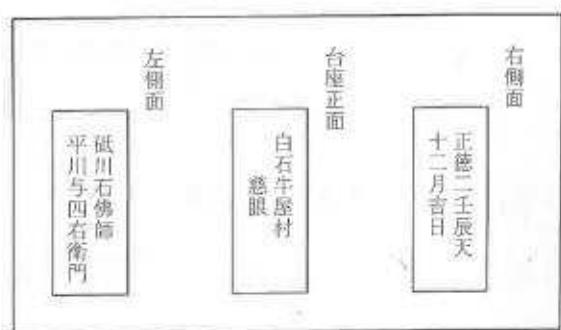
持つ。足には一本歯の下駄を履き、右足を半跏趺坐して左足を垂下する。台座に銘文を刻むが、初めて「石佛師」の表現が見られる。町重要文化財。



写真58



写真57



銘文②

## (18)竹迫六地蔵像(熊本県合志町)

【概要】九州縦貫道植木インターを下りて、国道3号を南下し、舞尾交差点から左へ折れ県道30号線を大津町方面へ向かうと、県道49号線と交差する付近が合志町竹迫(たかば)である。この竹迫地区には横町の道路脇、上町の談義所跡及び下町の道路脇2カ所の計4カ所に地蔵菩薩立像が安置されている。いずれも小さな堂を設けて祀られており、信仰の対象として大事にされていることが分かる。



位置図

## 22. 地蔵菩薩立像（竹迫横町）

これらの地蔵像は、元々は六体地蔵として制作されたものの、四体のみ遺存して町内各所に安置されたものであろう。横町道路脇の消防小屋に併設された堂に安置された地蔵菩薩立像は、摩滅及び表面剥離を部分的に受けており、保存状態は良くない。像高94cmを測る。持物は先が欠失しており全体像が不明である。柄香炉かと考えたが、後尾が繩状になっている。唇を赤色顔料で塗るが、



写真59



銘文②



写真60

## 23. 地蔵菩薩立像（竹迫上町）

談義所跡のお堂に安置される地蔵菩薩立像である。右手に錫状、左手に宝珠を持つもので、像高95cmを測る。衣の表現にそれまでと差異がある。例えば、通常は腰部から裾にかけて縦に流れる文様と横方向の波文を組み合わせた表現となるが、本像は縦の線が省略される。また、本像で初めて左肩から下がる袈裟が表現される。台座の銘文に与四右衛門名があるが「右」が抜けて刻まれる。



写真62



写真61



写真63



銘文②

## 24. 地蔵菩薩立像(竹迫下町①)

竹迫下町の山隈酒店前の道路脇に安置される。本像の下の蓮華座は残っているが、その下に置か

れるはずの塔部が現存していない。銘文はその台座に刻まれていたと考えられる。像高は96cmで、横からみるとかなり前傾している。両手で幢幡を持つ。幢幡には先端に房をもつ長い紐をつける。



写真64



写真65

## 25. 地蔵菩薩立像（竹迫上町）



写真66



写真67

新しいお堂に安置される。蓮華座の下の塔部を欠失しており、銘文不明。像高95cmを測り、胸元で両手を合わせるが、手首から先が破損。衣の文様や足先の表現が従来と異なるが、精巧である。

## (19) 西の原観音堂(熊本県植木町)

【概要】九州縦貫道植木インターを下り国道3号を南下すると、まもなく西の原集落へと延びる右に入る細い道がある。その道を進むと公民館があり、その横に観音堂が建つ。説明板によると、昭和45年に移転し現在地に建てられた。祀られる觀音菩薩立像の蓮華座より下は床下に隠れるため、銘文の確認ができなかった。従って、ここでは堂内の説明書に記された銘文を転載して報告する。



位置図

## 26. 聖觀音菩薩立像

本像は乳白色の石材を用いており特異である。これまで確認した与四右衛門銘石仏では類例がない。同様の石材を使ったもので確認しているのは凡道寺跡（山鹿市蒲生福原）に安置される肥前西川（現小城町三里）の石工「平川徳兵衛」銘の聖觀音菩薩立像のみである。



写真69

本像は像高120cmを測る。堂内に安置されていたとみえて非常に保存状況が良い。制作当時の状況を今に伝える貴重な石像である。しかし残念ながら首が折れ、接合跡が残る。右手には蓮華を持ち、左手は与願印を結ぶ。彫刻は木彫仏を見るかのように繊細で流麗な線を実現している。裳をはき天衣を身に纏う觀音像は、良縁寺（佐賀県鎮西町）のものに次いで本像が二例目。



写真68



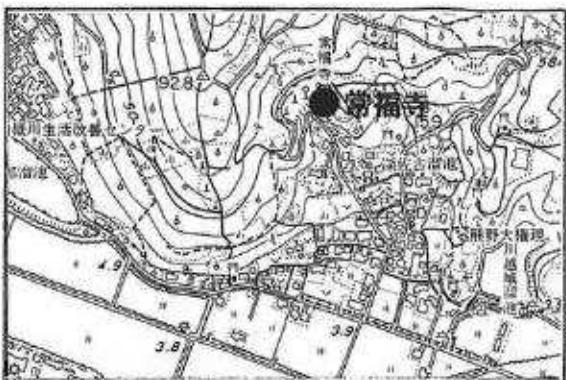
銘文⑯



写真70

## (20) 広巣山・常福寺(佐賀県牛津町)

【概要】国道34号砥川小学校前交差点を西に折れて直進し、谷公民館前で左に曲がって坂を上っていくと臨済宗南禅寺派の常福寺石門が見えてくる。この寺の創建は平安時代と伝えられ、その時期の所産である薬師如来坐像、帝釈天立像（国重要文化財）が安置される。桃山時代末期、元々は真言宗寺院だったのを小城円通寺第十一世の古月卯和尚が開山となって禪宗寺院に改めたと伝えられる。



位置図

### 27. 如意輪觀音菩薩半跏坐像

本像は右足を立て、左足を半跏趺坐する輪王坐を呈する。右手は肘を立てた右膝の上に置き頬に手をあてる。左手は左膝の後ろ側に置く。像高40cmを測り、与四右衛門による作品としては小型である。右手首部分及び宝冠、髪部分を欠失している。ノミはやや浅いが、柔軟な表情や流麗な衣の表現など彫刻の出来は良い。蓮華座の下には樽型の竿石を置き、周囲に銘文を刻む。町重要文化財。



写真72



写真71



写真73

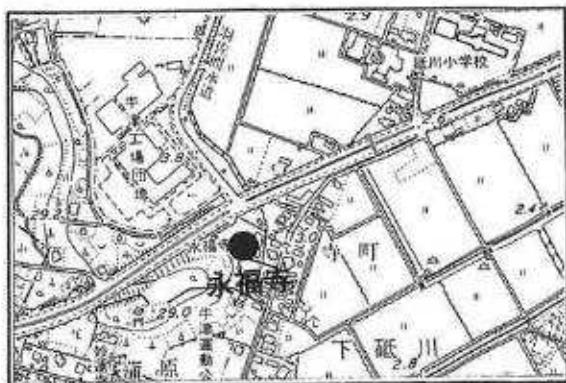
智知口  
光泰質  
童自好  
女子童  
辰峴天  
二月吉  
日丙  
與願四  
主保右  
平衛川  
門尉  
雪如幼  
庭因童  
童子女  
三界萬  
尊

円筒形台座  
(正面から右回り)

銘文⑦

## (21) 吸江山・永福寺(佐賀県牛津町)

【概要】国道34号を武雄市に向かって進むと、砥川小学校を過ぎて旧長崎街道が左に分岐するが、そのあたりに臨済宗南禅寺派の永福寺がある。この寺は小城円通寺の末寺で、南北朝時代に円通寺第四世勅賜覚海肯山聞悟禪師の開山と伝えられる。寛永の頃、禪宗和尚の代に現在地に移して中興した。境内には石像・石仏が多く安置され、縁刻六地蔵塔は室町期の所産と考えられる。



位置図

## 28. 地蔵菩薩半跏坐像

本像は亀甲型の基部一樽型竿石一方形中台一蓮華座を組合せた上に安置される。像高74cmを測る。右足は半跏趺坐で左足は垂下。右手首は欠失しているが錫杖を持つと考えられる。左手は左膝の上に置き宝珠を乗せる。右足先端及び左足首より先は欠失。長年の風化により顔を始め、石材の表面剥離が進んでいるが、衣などの表現にはノミが深くてよく残っている。町重要文化財。



写真74



写真75



写真76 銘文②

## (22) 多布施川路地（佐賀市）

【概要】江戸時代、成富兵庫茂安が大和町川上に石井樋を築き、嘉瀬川を流れる水を佐賀城内の上水とし引き込む役割を担ったのが多布施川である。この多布施川の堤防沿いで、多布施二丁目の路地に安置されているのが平川与四右衛門銘の石仏である。この像がどのような由縁によって、この場所に安置されたのかは不明である。



位置図

### 29. 地蔵菩薩立像

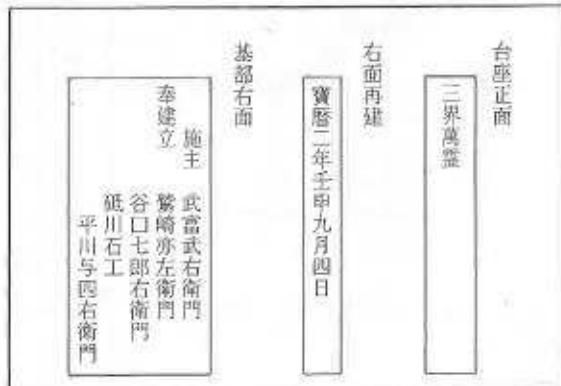
三界万靈塔の上に安置され、右手に錫杖、左手に宝珠を持つ地蔵菩薩立像である。小さな頭部とふっくらとした体部で、像のバランスが不均衡に感じられる。顔は彫りが良くシャープであるが、体部の衣には細かく精巧な線が表現されていない。足の表現もやや稚拙で、写実的な彫刻をその作風とする与四右衛門らしさが感じられない。台座及び基部に銘文が刻まれている。



写真77



写真78



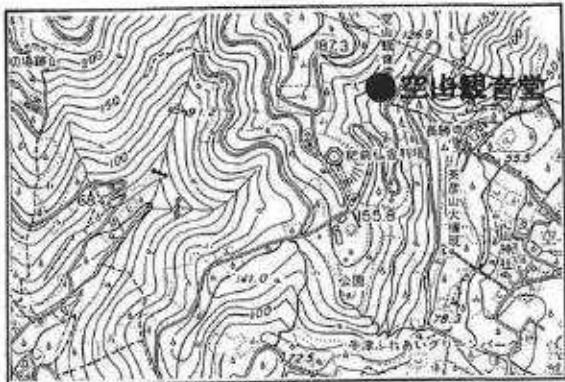
銘文⑩



写真79

## (23)空山觀音堂(佐賀県牛津町)

【概要】牛津町北西方向にある空山の山頂付近の林の中に空山觀音堂がある。巨福山・長勝寺の奥の院で、堂内には千手觀音菩薩坐像が祀られている。また、平安期作と思われる木彫像が安置されるが破損がひどい。境内には、江戸時代元禄期に若林傳左衛門が発願し、多くの人々により寄進奉納された石造三十三体觀音像が安置される。そのなかの二体に平川与四右衛門の銘が刻まれている。



位置図

### 30. 千手觀音菩薩立像

本像は三十三体觀音像の第12番で近江国岩間寺の本尊を刻んだものである。船形光背と一体型に彫り込んだ石像。像高70cmを測る。一面十二臂で、胸元で合掌印を結ぶ二臂以外が光背にレリーフ状に彫り出す。合掌手の一部及び両足先が欠失している。顔の表情、天衣、裳あるいは光背の彫刻それぞれにノミが深く、繊細かつ柔らかい。



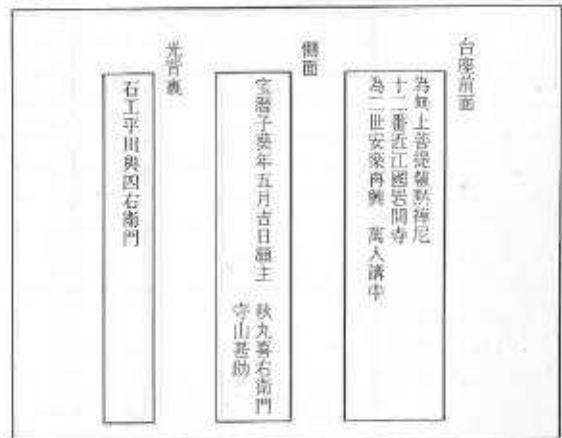
写真81



写真80



写真82



銘文30

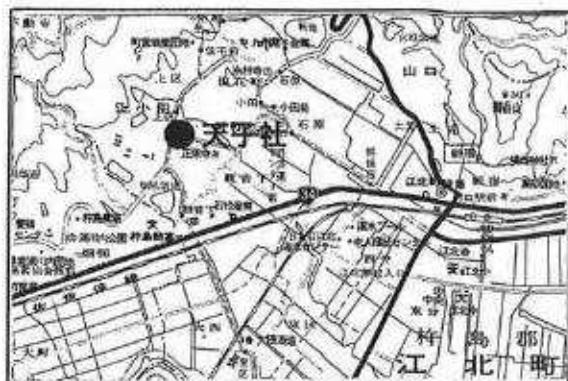
## (24)小田天子社(佐賀県江北町)

### 31. 石仏坐像

【概要】旧長崎街道小田宿に所在する天子社の境内奥に安置される石仏である。首から上の頭部が欠失している。衣・裳を身に付け、右手に数珠を持ち左手は膝の上で与願印を結ぶ。全体を苔が覆う。彫刻的には従来の表現と異なっている。



写真83



位置図



写真84



銘文⑪

## (25)金龍山・長徳寺(佐賀県大町町)

### 32. 六体地蔵菩薩像

【概要】旧長崎街道沿いの曹洞宗寺院である。寺の境内に安置されている六体地蔵で、全て首から上の頭部が欠失しており、現在は新しい六地蔵に取り替えられている。古い台座に銘文が刻まれる。



写真85



位置図



写真86



銘文⑫

# 制作時期不明の平川与四右衛門銘石仏

ここまで、平川与四右衛門銘石仏のなかで、制作時期を記した紀年銘あるいは勧請の由縁や寄進者名などの銘文が記されている石仏について時系列的に紹介してきた。

ところが、与四右衛門の名前が刻まれているにも関わらず、紀年銘その他の銘文が一切記されな

い石仏も存在する。確かに、単に紀年銘がある台座や他の部位が確認できなかったものもあるが、ほとんど完全な形で遺存しているのに与四右衛門銘以外にない石仏もある。石工銘を刻むことに固執した証なのかどうか、その理由は不明である。ここでは石工銘のみ遺存する石仏を解説していく。

## (26)空山観音堂(佐賀県牛津町)

【概要】長勝寺奥の院である空山観音堂の境内に安置される三十三体石仏のなかの一つである。元禄9年(1696)、若林傳左衛門将明が発願して寄進を始めるが、6番以降は別の人々が施主となって寄進を続けて三十三体の観音像の奉納を完成させた。

### 33. 十一面觀音菩薩立像

三十三体石仏の第30番。右手は与願印を結び、左手は蓮華を入れた水瓶を持つ。頭部周囲に十一面を造り出す。体躯は、若干であるが右側腰部に重心を移動させた姿勢になる。裳及び天衣を身に着ける。決してノミは深いといえないが、流れるような表現が施されている。顔は頸をやや細くして端正な顔立ちにし、柔軟な面相をつくる。残念ながら首から上が破損、修理箇所が明瞭。



写真88



銘文③



写真87

## (27)清涼山・光桂寺(佐賀県塩田町)

【概要】鹿島市浅浦方面から塩田町へと向かうと五町田農協手前より左に折れる。直進すると左手に吉浦神社の鳥居が見えてきて、しばらく行くと右手に臨済宗妙心寺派の光桂寺の山門がある。この寺は元禄9年(1696)、蓮池初代藩主鍋島直澄の五女である昭生禪尼が父直澄と亡夫である松平好房の菩提を弔うために建てた小庵「清涼庵」から発展、宝永5年(1708)に光桂寺に改号した。



位置図

## 34. 仁王立像（阿形）

寺の山門前の両脇に仁王立像を安置するもので、向かって右側に阿形、左側に吽形を配置する。

阿形は像高231cm。右足をやや前方に出す。右手は腰にあて、左手は金剛杵を振りあげる。頭には胄を被る。上半身裸体で裳・天衣を身につける。



写真90



写真89



写真91



写真92



写真93



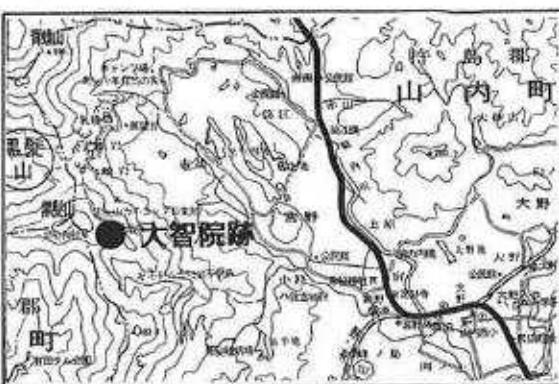
写真95



写真94

## (28) 黒髪山・大智院跡(佐賀県山内町)

【概要】伊万里市、西有田町境に立地する黒髪山は空海所縁の地と伝えられ、修験・山岳信仰の場として福岡の英彦山と並び称された。登山道としては、県道26号と257号が重なる宮野交差点から入る道があり、住吉城跡を過ぎて左の折れて上っていくと、山頂付近の大智院跡まで一本道。大智院は真言宗で、現在は佐世保市に移転しているが、跡地にはお堂の他、石仏・石塔が残されている。



位置図

### 36. 地蔵菩薩坐像

大智院跡裏に安置される。基部の上の蓮華座上に結跏趺坐する。像高85cm。両手を臍部前面に置き宝珠を持つ。額部は顎が太く下膨れの形態で、瞼を厚くして腫れぼったい表情をつくる。また、胸には瓔珞を飾る。衣はノミが浅いが、流れるような線刻を施す。全体に赤色顔料が塗られていた形跡がある。銘文は 蓮華座の蓮弁下側に「戸川谷村平川與四右衛門尉」と刻まれている。



写真96



写真97



写真98

## (29)印鑰神社（熊本県鏡町）

【概要】熊本市から八代市に向かって国道3号線を南下する。水川橋を渡って鏡町に入ると、すぐ宮原交差点があり、そこから右に折れて直進するとJR有佐駅にぶつかる。そこを迂回するようにして中心街へ向かうと右手に鏡小学校が見えてくる。印鑰神社はその西隣にあたる。拝殿から神殿に至る神域には格子壁が巡っており、その中の神殿脇に阿吽の狛犬像が安置されている。



位置図

### 36. 犬(阿形) 37. 犬(吽形)

神殿に向かって右手に阿形、左手に吽形が安置される。像高は約50cm。ともに三段の台座の上に安置される。足元の一段は石像と一体形。阿形は歯を剥き出しにした形相で、吽形はしっかりと口を結ぶ。両像とも目が丸く飛び出し鼻が広がるため、ユーモラスな表情にみえる。顔部に比べて体部は細かい表現が省略される。前脚及び前脚と後脚の間は透かしが入る。阿形狛犬の台座部分に「肥前國戸川村平川与四右衛門」と刻まれている。



写真99



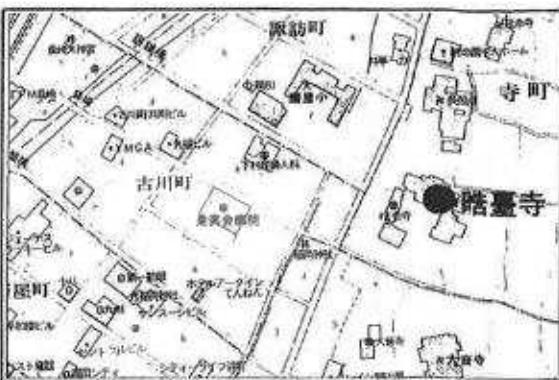
写真100



写真101

### (30) 海雲山・皓臺寺（長崎市）

【概要】長崎市鍛冶屋町から寺町にかけては唐寺、崇福寺から始まって13の寺が道沿いに並んでいる。そのほぼ中央に曹洞宗寺院皓臺寺がある。総門、山門、大仏殿、僧堂、鐘楼堂、本堂からなる。大仏殿には佐賀の鋳物師によって鋳造されたといわれる延宝5年(1677)建立の毘盧舎那仏坐像がある。また鐘楼堂の梵鐘は、元禄15年(1702)に改鋸されたもので、佐賀の鋳物師谷口安左衛門の手による。



位置図

### 39. 如意輪觀音菩薩半跏趺坐像

本像は蓮弁形光背を一体に彫る。一面六臂で、右足を立て左足を半跏趺坐した輪王坐を呈し、頭部には宝冠を飾り立ち姿の化仏を戴く。光背には頭光、雲文をレリーフ。顔部は瞼が厚く腫れぼったい目元で、鼻筋が太い。口元はくっきりと締まる。右三臂は第一手が頬にあてる思惟形で、第二



写真102



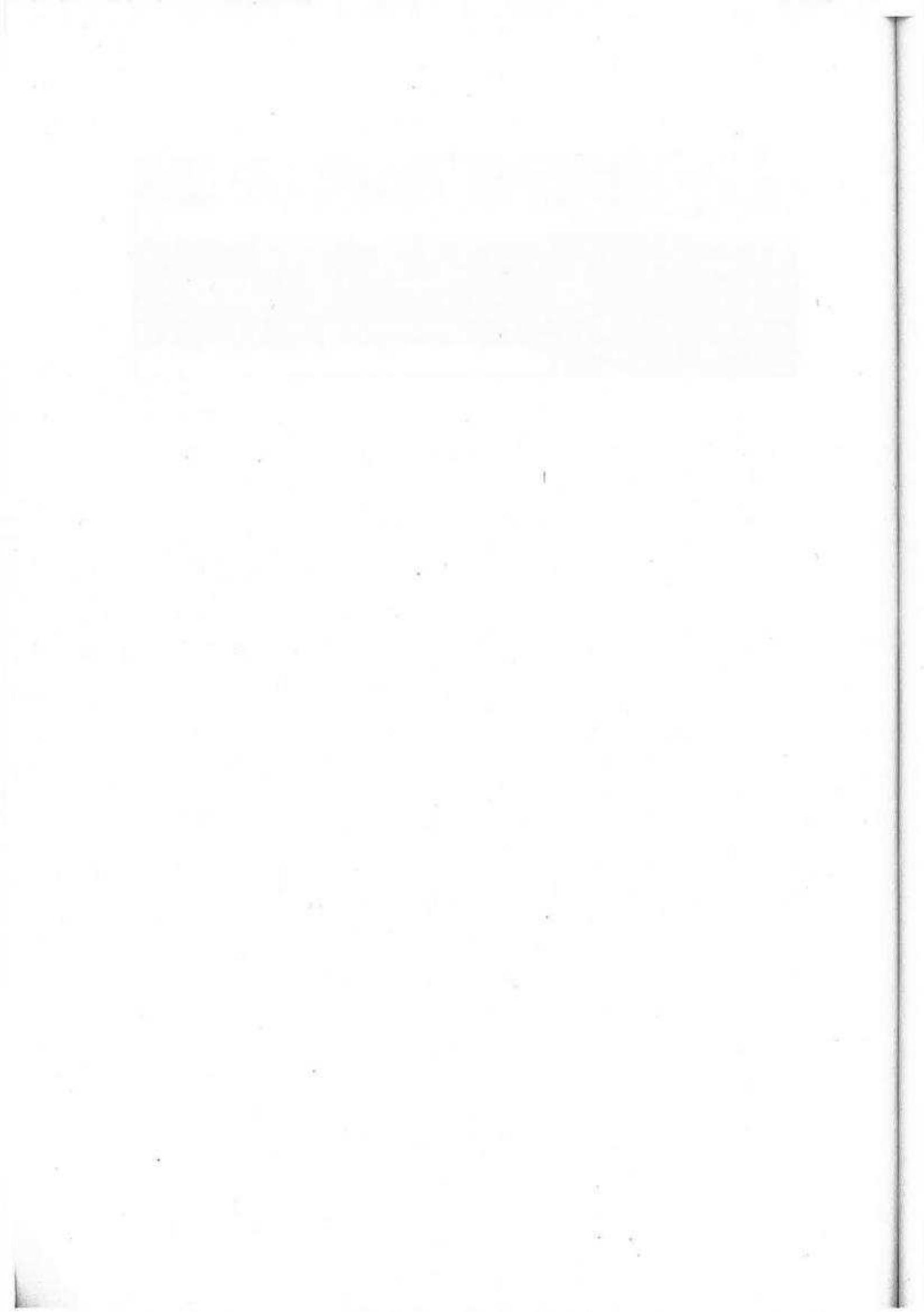
写真103

手が如意宝珠をもち、第三手が右足後方に下ろして数珠をもつ。左三臂は第一手が左足後方で台座に伸ばす。第二手が蓮華をもち、第三手が金輪をかける。胸には瓊塔を飾り、天衣・裳を身につける。光背側面に「肥前戸川之住平河與四右衛門作」の銘。彫刻の出来は素晴らしい傑作のひとつ。

---

付論

---



# 肥前石仏師平川与四右衛門

竹下正博

長崎街道と有明海の交通の接点として賑わいをみせた江戸時代の牛津では、鳥居や石仏などを制作する石工の集団が活躍していた。いまの牛津町砥川のあたりに工房を構えていたことから、肥前砥川石工と呼ばれている。近世の肥前では、ほかに塩田、値賀川内（玄海町）で石工が活動していたが、いずれもが砥川石工の流れを汲むという（注1）。砥川石工については、寛文5年（1665）に成立した『肥前古跡縁起』に記事があり、鳥居や石灯籠、臼、鉢などをつくり、とくに仏像・神体の制作を得意としていたといわれる（注2）。なかでも、その頭領格であったと思われる平川与四右衛門の作品は仏像のみに限られていて、丸彫りで規模も大きく、中国・明清時代の様式を取り入れた作風は斬新で、出来栄えも優れている。彩色が施され、室内安置を前提としてつくられた仏像があることも注目される。自らを石仏師と称していることは、一介の石工にとどまらない自負を感じさせる。

本稿では、まず平川与四右衛門にいたる前史として古代・中世の肥前の石仏の歴史を紹介し、ついで、近世・江戸時代の仏像とその流通の様相を見ることで、与四右衛門の登場とその作品が広く受け入れられた背景について考える。最後に、与四右衛門の作品そのものについて検討し、石の仏師として、近世美術史上における位置を探りたい。

## 一、肥前の石仏

肥前に残る石仏としては、相知町の立石磨崖仏や花峰の観音像が最も古い例である（注3）。花峰の観音像は像高139センチ、丸彫りでつくられた十一面觀音菩薩の立像で、平安時代の制作と考えられている。古代・中世の石仏には丸彫りの作品は極めて珍しく例外的で、むしろ磨崖仏の例が多い。立石磨崖仏は、薬師如來坐像と阿弥陀如來

坐像、觀音菩薩立像の三像が磨崖に浮彫りであらわされていて、阿弥陀如來の台座の形や觀音像の太づくりな作風から平安時代の制作と考えられている。近くには南北朝時代から室町時代にかけて彫られたと推定されている鶴殿石仏などがある。いずれも修驗道にかかわるものであろう。鎌倉時代の作例としては、太良町竹崎觀世音寺三重塔や唐津城下の宝塔に浮彫りにされた仏像が挙げられる。南北朝時代には正平10年（1355）の基山町金剛童子像や応安6年（1373）大町町福母の地蔵菩薩像など、自然石に半肉彫りや線彫りで表現したものがみられ、室町時代前期の15世紀前半ころまでの作例が確認される。室町時代後期には石塔の一部に六地蔵を浮彫りにした六地蔵石塔が流行し、文明16年（1484）のものを初例として江戸時代前期までみられる。

このように、肥前の石仏の歴史について振り返ってみると、磨崖や自然石、石塔の一部として造像されることがほとんどであり、独立した彫刻としての形態にいたらず、木造彫刻に比べて彫技や表現が劣っている点はいなめない。これら古代・中世の石仏と、丸彫りによって複雑な形態を彫出する平川与四右衛門の作風は隔絶した感があり、むしろ与四右衛門の作風は木造の仏像をつくる木仏師の系譜につながることを想像させる。

## 二、近世の仏像

近世初頭の16世紀の肥前では、元亀4年（1573）に和崎地蔵堂の地蔵菩薩像をつくった猪熊治部丞など博多猪熊仏師や天正8年（1580）に三田川町東妙寺の唯円上人像をつくった京仏師心月斎などが活発に活動している。いずれも他の地域の仏師であり、この時期の肥前には在地の本格的仏師がいなかったことを想像させる。彼らの足跡も江戸時代には絶え、かわりに京都で大量生産

された既製品の仏像が流通するようになる（注4）。幕藩体制の確立によって政治状況が安定して流通経済が活性化したこと、檀家制度や寺請制度により寺院数が一時に増加したことなどがその理由であろうか。大量な既製品の流通が地方在住の木仏師の仕事を奪った可能性は高い。この時期、肥前の木仏師の活動は修理が主であったように思われ、むしろ新規の制作に関しては鋳物師の手による銅造の仏像が目につく。佐賀藩領の梵鐘や半鐘の多くを手掛けている谷口鋳物師は8件の造像が確認されている。とくに有明町福泉寺の観音菩薩像は大型で出来もよく、多くの人々の寄進をもとにつくられている。このような事例は、既製の仏像に満足しない人々が町民層を中心に多数いたことを物語っている。石工にも同様の需要があったと考えてよいだろう。既製品の大量流通が、本格的な木仏師の仕事を奪い、わずかに残った仏像の注文制作は鋳物師や石工などによって需要が満たされていたと想像される。平川与四右衛門の作品が求められる背景のひとつであろう。流通の活性化は別の面でも平川与四右衛門の活動に有益であった。牛津砥川のそばを流れる牛津川は有明海運の拠点のひとつで、近代まで石材や石製品の運搬に用いられてきた（注5）。正保4年（1647）の国絵図によれば、この時期にはすでに牛津川に千石積の船が出入りしていることが確認される（注6）。平川与四右衛門の作品は、長崎や熊本の、とくに有明海沿いに多く分布していて、有明海を行き交った船によって広められたと考えてよいであろう。

### 三、平川与四右衛門の作品

これまで、平川与四右衛門登場までの石仏の歴史と同時代の背景について、概略をたどってみた。ここでは、与四右衛門の作品について、広く受け入れられたその魅力について考えてみたい。

与四右衛門の作品は、佐賀、長崎、熊本の3県にまたがって31件の在銘像が確認されている。その活動は貞享4年（1687）から宝暦4年（1754）にかけての70年近い長期にわたり、二代あるいは三代にわたっての制作が予想され、その代別ある

いは工房作の判別がこれからの課題であろう。これまでの調査は所在の確認に重点がおかれ、個々の作品についての詳細な調査は十分でない。また、今後の調査により、在銘作品が大幅に増加することも確実であると思われ、現時点での判断は躊躇されるが、これから展望として若干の問題点を提起しておく。

前述のごとく、与四右衛門の作品は70年近い長期にわたって確認され、その年代的分布も偏りの少ないものだが、2度の空白期があり、とくに注目されるのは、正徳2年（1712）から享保12年（1727）にかけてで、正徳2年以前には銘文の記載内容に統一感がなく、みずからを呼称する際にも「石工」「作者」「石工師」「仏工」「石仏師」などと記している。仏工や石仏師などの呼称は、仏像制作を得意とする与四右衛門にふさわしく、満々たる自負を感じさせるものである。ノブテルと読むのだろうか「信照」あるいは「信輝」の実名が記される作品もある。元禄12年（1699）の長崎市靈巖院観音菩薩像や同年の有明町稻佐神社地蔵菩薩像、宝永5年（1708）の牛津町谷公民館千手観音菩薩像である。元禄5年（1692）に溯って与四右衛門信照の活動を示唆する記録があることも見逃せない（注7）。一方で、空白期のうちの享保12年以降は「石工」の呼称に統一され、実名を記すものもない。銘文の内容全体も定型化している。享保12年の作品である熊本県合志町竹迫横町の六体地蔵像では「平川与四右衛門」と「衛」が抜け、同年同町竹迫上町の六体地蔵像では「平川与四右衛門」と「右」が抜けている。彫技も鈍く、表現が難しい素足を避けて靴を履く点も注意され、工房での制作を想像させる。

以上にみてきたことから、正徳2年から享保12年の空白期の間に、世代の交替などの転機を想定することも可能である（注8）。つぎに実作品に沿って与四右衛門の作風の変遷を追ってみたい。

与四右衛門の作品は貞享4年（1687）年から確認されるが、初期の作品で注目されるのは翌年の元禄元年（1688）に制作された唐津市近松寺の遠室明超像である。近松寺は臨済宗南禅寺派に属する松浦地方きっての名刹で、透明使として活躍し

た博多聖福寺の僧湖心礪鼎が再興し、その法子耳峰玄熊が中興している。遠室禪師の像は背面の銘文から生前につくられた寿像であることが明らかであり、こまやかな彫技で刻まれた穏やかな表情は遠室禪師の人柄をよく写している。払子を持つ伝統的な肖像の型を踏襲しており、白色顔料を下地とした本格の彩色がなされていたようである。極めて公的な性格の強いもので、現在は本堂内に安置されているが、当初から頭塔などの屋内で拝されていたものであろう。このような肖像彫刻は木造で制作されることが通例で、近松寺のように格式の高い寺院においてはなおさらであろう。あえて石造でつくり、与四右衛門を起用していることは、与四右衛門と近松寺あるいは遠室禪師との間に密接な関係があったことをうかがわせる。

『牛津町史』によれば、朝鮮出兵のため文禄元年（1592）に築かれた肥前名護屋城では、砥川の石工徳永九郎左衛門が築城に参加して石垣などをつくったといわれている。近松寺を中興した耳峰禪師は、朝鮮出兵の際には外交に重要な役割を果たしており、砥川石工と近松寺の関係もこのときに始まるのかも知れない。また、遠室禪師像の翌年の元禄2年（1689）に制作された呼子町小川島觀音堂の觀音菩薩像をみると、中世後期の伝統的様式をかなり濃厚に受け継いでいる。膝頭をめぐって下におりる衣文は、釣針のフックに見立てて釣針状の衣文と呼ばれるもので、南北朝から室町時代かけて一世を風靡した院派仏師が得意とした表現で、禪宗寺院を中心として大変に流行したものである（注9）。このような表現は木造の仏像に受け継がれたもので、石仏の伝統にはない。与四右衛門がこのような伝統的様式を身に付けた契機として、先述したような近松寺との関係が注目される。あるいは、砥川周辺の臨済の古刹常福寺や永福寺で造像を行っていることも無視できないであろう。いずれにしても、ここにみられるのは中世以来の伝統的表現を忠実に繼承しようとする態度であり、この時期に長崎にもたらされていた中国・明清時代の彫刻様式の影響は未だ明確には認めがたいことは留意すべきである。

一転して、元禄4年（1691）の牛津町熊野權現

神社の布袋像は中国的色彩の濃い作品である。日本では福德神として民間信仰的性格が強い布袋であるが、中国の禪寺では弥勒菩薩の化身として盛んに信仰された。その姿は聖福寺など長崎の唐寺にもみることができるが、熊野權現像の、片膝を立てて座り、大笑する様子はまさに中国的である。元禄9年（1696）の鹿島市幽照寺の地蔵菩薩像は大変に優れた出来の大作であるが、衣文線が多い点や下腹部に見られる波打つような衣文などに明清様式の影響が認められる。これを潮る元禄5年（1692）ころには長崎の唐寺靈源院で大規模な活動を始めていて、靈源院のほかにも唐寺の福濟寺に作品が現存している。いずれも明清様式の影響を受けているが、この時期においてはまだ小川島の觀音菩薩像にみられたような日本の伝統的作風が残っていることに注目したい。幽照寺像についてみれば、腹前の裳の折り返し、右膝頭の釣針状の衣文などがみられる。釣針状の衣文は宝永5年（1708）の熊本市靈巖寺釈迦如來像にも確認される。この頃までの作風は、日本の伝統的様式に明清様式を加味したものと捉えてよいだろう。しかし、制作年はあきらかでないものの、山内町大智院地蔵菩薩像や長崎皓臺寺如意輪觀音菩薩像にいたって、明清様式が基調となる。眼球の膨らみを強調し、胸飾りなどの装飾品が増え、衣文線の表現も変化して2本の陰刻線で挟んだ紐状の衣文線が目につく。日本の伝統的作風がほとんど認められなくなり、膝頭の釣針状の衣文は消え、腹前の裳は折り返しをつくらず左右対象の形に整えるところも中国風である。作品の数が多い地蔵菩薩の立像の脚部の衣文についても、年代をおって縦から横の衣文にかわり、中国色を強めている点も見逃せない。

#### 四、平川与四右衛門の時代

与四右衛門の作風が主に禪寺との関わりによって形成された日本の伝統的様式から出発し、徐々に中国・明清様式の影響が強くなっていくことをみてきた。ではそれは近世美術史のなかにおいてどう位置づけられるであろうか。

与四右衛門が活動した17世紀後半から18世紀の

美術に最も大きな影響を与えたのは、承応3年（1654）の中国僧隱元禪師の来日にともなう中国禪文化の流行である。黄檗派と呼ばれる隱元禪師の禪は、日本の臨済禪と源流を同じくするが、ながい間に和風化し、停滞していた日本の禪と異なり、斬新な中国風が大名を始めとする知識階級に受け入れられた。唐様（からよう）と呼ばれた隱元禪師らの書や、唐絵（からえ）と称される中国僧逸然や中国人画家陳賢の絵画は高い評価を得て迎えられている。

黄檗派の本山である宇治萬福寺の末寺は18世紀なかばころには1000を超えていた。長崎を窓口に、黄檗派を受皿として日本に流入した中国文化は、黄檗派の隆盛とともに日本全国に広がった。肥前においては特に盛んで、鍋島家の庇護のもと、多数の黄檗寺院が建立され、既存の禪宗寺院においても黄檗僧が揮毫した額などを掲げるなど影響がみられる。小城では三代藩主鍋島元武（1662～1713）が出家して黄檗僧となり、貞享元年（1684）から始まった星巖寺の創建に尽力し、小城鍋島家の菩提寺としている。同じ藩領内の寺院築造には与四右衛門ら砥川の石工が関わったと考えるのが自然であり、与四右衛門と中国文化の接点をこのあたりに求めてよいであろう（注10）。

黄檗の文化は、当初は隱元禪師ら中国僧とその周辺の中国人の画家、仏師、大工らによって築かれたが、次第に日本人に引き継がれていく。黄檗のひとつの特色をなす僧侶の肖像画（頂相）は中国人画家楊道真から日本人画家喜多道矩・元規へ、唐絵と称される絵画は中国僧逸然から日本人の河村若芝らへ、木造彫刻は范道生から康祐らへと受け継がれていくのである。与四右衛門の時代はこの時期にあたる。中国僧に伴われて来日し、長崎で活動した中国人から最新の中国文化を学んだ日本人の一人が平川与四右衛門であったのであろう。

中世以来の伝統様式に加え、最新流行の中国・明清様式を身につけた与四右衛門は、近世文化の大きな流れのなかにあった。その技量は木仏師に優るとも劣らず、格式の高い肖像彫刻や屋内安置の仏像など、伝統的に木仏師が担ってきた高い水準の造像を行っている。作品の質の高さとともに、

その量と広がりを考え合わせれば、近世美術史に与四右衛門が果たした役割は小さなものではない。多良岳神社の役行者像の銘文に、与四右衛門は石仏師と刻んでいる。石へのこだわりとともに、仏師の響きはとおく定朝、蓮慶を連想させる。与四右衛門の自負のあらわれであろうか、実にふさわしい。（佐賀県立博物館 学芸員）

注1 砥川石工に関する主な文献は次のとおり。

『牛津町史』 1990年

『あるさとの石仏たち』 牛津町教育委員会 1996年  
永竹威「肥前の石彫遍歴－名工平川与四右衛門考－」『石の歴史』 佐賀県文化館 1969年  
丸田利実「名工、平川與四右衛門」『末盧国』 78号  
溝下昌美「石工 平川徳兵衛とその作品」『日本の石仏』 77号

坂口雅柳「名工平川与四右衛門と高森」『肥後金石研究』 10号

注2 「肥前古跡縁起」「砥川八幡宮」

（前略）此處に昔より石切共住侍り、仏像神体を始奉り、まくら、鳥井、石燈籠、花立、手水石、石盤、石薬研、すけ石、菊白、引白、すりこ鉢、種々様々の物切かたかたひなひて面白所也（後略）

注3 肥前の石仏については、次に詳しい。

『石の歴史』 佐賀県文化館 1969年

志佐惣彦「肥前の石造物」「肥前の中世美術」佐賀県立博物館 1985年

中村勲「県下の在銘六地蔵一覧」「肥前の中世美術」佐賀県立博物館 1985年

『肥前相知 聰殿石佛』 九州歴史資料館 1991年

注4 「仏を刻む」 堀市博物館 1997年

注5 『牛津町史』 907頁

注6 『有明海博物誌』 佐賀県立博物館 1999年

注7 『重要文化財 眼鏡橋移築修理工事報告書』

諫早市教育委員会 1961年 48頁

らかん橋の条

「元禄5年～10年（1692～1697）の間、長崎の豪家松田金兵衛氏が巨資を投じて、石工棟梁（肥前戸川の人平川与四右衛門信照ら数名）を招き、石像觀音像数百体を奉納した。」

注8 脱稿後、正徳3年と宝暦5年の墓碑と位牌について、ご教示を受けた。大橋氏論文参照。

注9 中世九州の院派仏師についてはつぎの論文に紹介した。

竹下正博「肥前高城寺諸仏の研究」「鹿島美術研究」15号 1998年

注10 九州の黄檗の文化や美術に関してはつぎに詳しい。

展覧会図録「黄檗禪の美術」福岡県立美術館・佐賀県立美術館・長崎県立美術博物館 1993年

# 平川与四右衛門銘石仏と信仰

小森浩文

仏と信仰は、切っても切り離せないものである。人間は有史以来、自然を信仰し、神仏を信仰し続けてきた。人間が何らかの対象物を信仰するということは、目に見えない何らかの存在を感じ、人間の力では凡そおよびもつかないことを思い対象物に対して帰依していくことである。

本来であれば、前段として仏教の伝来から踏まえておくべきかもしれないが、長くなるのでここでは省略する。

平川与四右衛門という石工の名前は以前から知っていた。その与四右衛門の現存する石仏のリストを見ると39体確認されている。佐賀県内は勿論、長崎県、熊本県にまで分布している。聞くところによると一石工として、これほど名前が残っているのは非常に珍しく、実際は作品自体もっと存在していたはずであるという。その確認された石仏の大半を地蔵菩薩と観音菩薩が占めている。

地蔵菩薩は、釈迦の涅槃入滅後、弥勒菩薩が現れるまでの無仏の間にこの世に現われて、衆生を救済する菩薩と説かれている。平安中期以後、極楽浄土の信仰が盛んとなる。地蔵菩薩は、末法思想の広まりにつれて六道をめぐって衆生を救い、極楽にいけるように力を貸してくれると信じられ、広く信仰された。さらに、近世になって庶民の間に広まり、病気治癒や防火、盜難除けなど、あらゆる願いをかなえてくれる仏として信仰され、地蔵講や地蔵盆などの行事に発展していった。また、西(賽)の河原で地蔵が子供を護るというところから、地蔵と子供とは強く結びつき、子安地蔵、子育地蔵の名で各地で多く信仰されている。

リストによると、地蔵菩薩は佐賀、長崎、熊本の三県にまたがり確認されている。

鎮西町洞済寺の地蔵菩薩立像は「平等利益」を願い、長崎市福済寺の地蔵菩薩半跏坐像は先祖の菩提を弔うために制作されている。

有明町福泉寺の地蔵菩薩は比較的銘文が分かりやすい。

## 「安置

肥前州杵島郡上田野上村川原谷  
願主立像一軀請方有縁仁者同志  
□財所建立也  
願□以此勝功德二世所求皆能足  
□元禄十五壬午年  
臨濟正傳勾入來西岳本願□點眼  
佛工平川與四右衛門」

福泉寺は臨済宗東福寺派の名刹である。銘文は場所、願主、目的、時などが明確に刻まれている。銘文中の「勾入」がどういう意味かはわからないが、地蔵菩薩坐像建立することにより功德を求める、二世安樂を求めるることは、前出の洞済寺や福済寺の地蔵菩薩に刻まれたものと相通するものがある。

地蔵菩薩（単体）は、概ね左手に宝珠を持ち、右手に錫杖を持つものが多い。宝珠は財宝を得る、錫杖は善心をおこすという意味を持つ。

地蔵菩薩は、他の如来や菩薩のように宝冠を戴いていない。普通に頭をまるめて法衣をまとっているだけである。これは、いかめしい菩薩の格好では衆生の中に入り込みにくいであろうという菩薩の慈悲心に他ならない。我々にとっては身近に感じられる菩薩である。

次に観音菩薩についてみていきたい。観音菩薩は一種の万能的な信仰対象として拝まれ、仏教が伝来してきた時から最も効驗ある崇拜の対象の一つとして拝まれてきている。觀世音菩薩、觀自在菩薩ともいい、33の姿を現して衆生の救いを求める声（音）を聞くと自由自在に救済するといわれている。

観音信仰は古来より行われたが、西国三十三ヶ



写真A

所、坂東・秩父三十三ヶ所の靈場が作られるようになり、江戸時代に広く庶民普及することになったのである。

さて、確認された与四右衛門作の觀音菩薩のうち、半数以上が聖觀音菩薩である。聖觀音菩薩は、いわゆる觀音菩薩の総体といえるものである。

リストにより個別にみてみると、呼子町の小川島觀音堂の聖觀音菩薩坐像が目をひく。元禄2年(1689)製作であるが、完成度が高く保存状態が大変よい。蓮台の下の台座の正面に「三界萬靈十方至聖」とあるが、その回りには戒名が多く刻まれている。推測であるが、この地域は信仰心が大変厚く、極楽往生の願望が強かったのではないかと思う。

次に、長崎市の靈巖院(通称；滝の觀音)の聖觀音菩薩は面白い作である。一般的に単体が多いが、ここは龍女、善財を脇に置く三尊になっているからである。

聖觀音菩薩台座正面の銘文は、「福増名□□資□多吉祥 諸□□□散安祥住福田 長壽乃安樂興慈度有情 彼□大牟尼具徳如是説」とある。施主の願望がことのほか強く込められている様に見受けられるのは聖菩薩觀音、龍女、善財に



写真B

それぞれ戒名(聖觀音菩薩は大人、龍女は子供の女子、善財は子供の男子)が刻まれているからだろうか。永劫の冥福を願い、与四右衛門に依頼したもののである(3体とも、元禄十三年五月廿九日になっている)。余談であるが、他の与四右衛門作品では自分のことを「石工」としているが、この作品だけは「石匠」としている。

施主(建立者)にしても与四右衛門にしてもかなりの想いで製作したのではないだろうか。作品と銘文からひしひしと伝わってくるものがある。

牛津町の谷公民館内に安置されている千手觀音菩薩坐像は半肉彫りである。

本来は、千手千眼觀自在菩薩といい、千の手を持ち、それぞれの掌に眼を持ち、衆生の苦しみを済度する觀音菩薩である。

谷公民館内の千手觀音菩薩の銘文をみてみると次のように刻まれている。

「奉影刻千手觀音菩薩尊像一軒  
當村善男子善女子依此功德皆令  
離若得安穩樂□  
干時宝永五戊子閏正月吉陽日  
現住常福禪寺南溪農誌□  
石工 平川与四右衛門信照」



写真C



写真D

時の住職であった南溪農和尚が千手観音を建立したことによる功德によって村民の安樂を願い、与四右衛門に依頼したのであろう。千手観音菩薩は、元来“六觀音”的ひとつに数えられる古来より人気を集めた菩薩である。

千手とはいながら、この谷公民館千手観音は手は12本である。1本の手で百の世界を救うものと考えて製作されたのであろう。持物は錫杖（善心をおこす）、経巻（善き教えを聞く）、矢（善友にあう）、鉢（逆賊撃退）、輪宝（菩提心の強化）、弓（榮官をます）などが見られる。

如意輪観音菩薩は、牛津町常福寺と長崎市皓臺寺が確認されているが、ここで2体を比較検討してみたい。如意輪観音菩薩は、車輪がどこでも転がるように意のままに現われ、六道の衆生の苦しみを取り去り、利益を与える菩薩とされているが、同じ制作者でありながら、作風の違いが面白い。常福寺の像は2臂像で、皓臺寺のそれは6臂像。さらに、皓臺寺の如意輪観音菩薩の光背の模様は中国風で、全体の彫りも常福寺の像より細か。作風がここまで違うと、本当に同一人物かと思いつくる。

種々と観音菩薩像をみてきたが、観音菩薩は男女の性別を超えた存在で、釈尊が悟った純粹な人間性の動きを象徴し、人格化されたものである。熊本市の雲巖禪寺の十六羅漢は、貴重な作品である。当時の雲巖寺住職は、一般庶民救済のためにこの十六羅漢像安置を考え、与四右衛門らに制作



写真E



写真F

を依頼し、宝永五年（1708）に完成している。

羅漢は阿羅漢の略語で、完全に悟りを開いた功德のそなわった最上の仏教修行者の意である。十六羅漢は仮の命をうけ、長くこの世にとどまって仏法を護るという賓頭盧尊者以下16人の尊者をさす。羅漢は釈尊のそばにいた修行者たちだから、一体一体の表情がとても豊かで、怒った顔、泣きそうな顔、笑った顔、あるいは訪れた者をやさしく迎え入れてくれるような顔まで、実に様々である。また、我々に親近感を感じさせる石仏である。

さて今まで、与四右衛門作の地蔵菩薩像、観音菩薩像、羅漢像をみてきたが、こうした石仏は発願者の信仰心の具現化したものである。そして、制作者にも同様のものが存在するのではないかだろうか。信仰心なくしては人々が合掌したくなる石仏を彫ることはできない、と私は思う。この心は、すべての人が生まれながらにして、持ち合わせているものであろう。換言するならば、純粹な人間性（仮性、ほとけのいのち）の具現化された石仏像を礼拝することは、“自分の中に存在するもう一人の自分”を拝むことに他ならない。

そのようなことを考えると、肥前国を中心に活躍した石工平川与四右衛門の出現は、時代の要請だったのかもしれない。

（臨濟宗東福寺派、穂松山平安寺住職）

#### 【参考文献】

『日本石仏辞典』（庚申懇話会編、雄山閣）

『観音さま入門』（大法輪閣）

『観音信仰と民俗』（横田健一、木耳社）

# 平川与四右衛門的作風の無銘石仏について

佐賀県内及び熊本県内の平川与四右衛門銘石仏の分布に関しては、郷土史家や石仏愛好者の踏査によってすでに明らかにされていた。従って、当教育委員会ではその既存情報を整理し、所在確認のための調査を行うという作業で事が足りた。

ところが、長崎県及び福岡県という隣接県については全く情報がなかったため、とにかく手当たり次第に石仏がある場所を見て歩くという方法を探らざるを得なかった。長崎市内は、ほぼ全域の寺について訪ねることにした。また長崎県内では諫早市と佐世保市、そして福岡県内では久留米市、柳川市、大牟田市について、石仏を多く安置する禪宗系寺院を中心に調査することにした。その結果、すでに報告したように計39体の平川与四右衛門銘石仏を確認できたのである。

この一連の調査の中で、「平川与四右衛門」の銘が入らないものの、その作風に非常によく似ている石仏もいくつか確認されている。石工名は不明である。奉納時期についてもその多くが不明であり、与四右衛門との関係も明らかではない。

調査の過程において、与四右衛門の制作技術が肥前石工の作風に大きく影響していることが分かってきていたが、与四右衛門銘石仏と見間違うほど優秀な無銘石仏の存在は何を意味するのであろうか。調査のなかでは、与四右衛門に影響を与えた仏師や石工あるいはその作品を発見することも一つの重要な課題であった。だが、確証をつかむまでには至らなかった。

ここでは影響下にある石仏または影響を与えた可能性のあるもの含めて紹介し、解説を試みたい。

与四右衛門銘石仏に見受けられる特徴を挙げると、中国仏教の影響を強く受けている作品が多いという点であろう。その代表的な石仏としては、長崎昭臺寺の如意輪観音半跏坐像と黒髪山大智院跡の地蔵菩薩坐像である。いずれも創作時期が不

明であるが、これらに特徴が似ている無銘石仏として、以下のようなものがある。

まず、長崎市の延命寺（真言宗）に安置される地蔵菩薩半跏坐像（写真①）がある。この石仏の二重の蓮華座はその形態及び彫刻が昭臺寺如意輪観音像のそれとよく似る。本像の顔は上目蓋を厚くし、頬をやや膨らませた顔立ちで、昭臺寺如意輪観音像及び大智院跡の地蔵坐像と同形である。胸に瓔珞を飾るのも同様。衣は流麗な線で表現する。形式的に同じ長崎市福濟寺の地蔵像や鹿島市幽照寺の地蔵像の衣の表現と比較すると、やや線が細かく単調な感じがする。

同じ形式のものとしては水晶寺（長崎市）門前に安置される石仏（写真②）がある。こちらは、原爆による爆風被害があって、手首先や顔部など



写真①

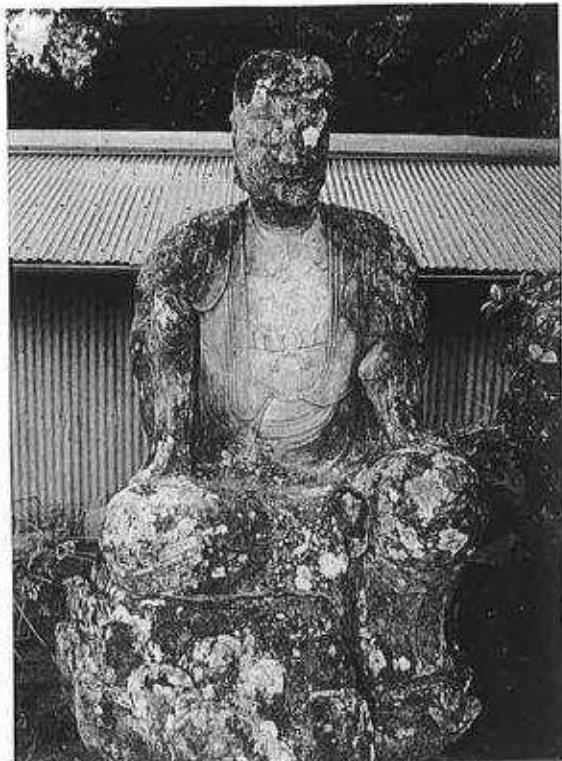


写真②  
が欠失しているが、延命寺のものと同じ作者の手によるものではないかと思えるほど全体的によく似ている。

もう一つ、同タイプの地蔵半跏坐像（写真③）が長崎市清水寺の門前に安置されている。前述の二つの石仏に比べて、蓮華座はやや厚く一段で作られ、下は塔部と請花で構成される。両手が欠失しているが右手に錫杖、左手に宝珠を持つものであろう。顔部は両耳部が欠失し、左側眼元から顎にかけて表面剥離しているため印象は前者とかなり違って見えるが、従来は下膨れのふくよかな顔立ちであったと考えられる。衣や裳上端部及び胸元の瓔珞は、いずれも前述した石仏に良く似ており、同系統と位置づけてもよいと思われる。特に、左膝を大きく作り、足元にかけて湾曲させた裳の表現などは無銘石仏三点に共通している。

このように中国から入ってきた黄檗宗の文化の影響を受けた石仏は、いったいどの時期に制作されたのか、今のところ知る手がかりがない。

これまで確認されている与四右衛門銘石仏が最初に登場してくるのは、元禄時代直前である貞享4年（1687）である。それ以前に前述した中國的色



写真③

彩が強い石仏が刻まれた可能性は低い。というのは、貞享4年銘が入る黒崎神社（唐津市）の聖観音菩薩像、地蔵菩薩像とともに日本にある伝統的な木彫仏の様式に近い造形で、中国仏教的要素の石仏からこの日本の色彩の強い石仏に転換されたとは考えにくい。ここでは日本的なものから中國文化の影響を受けて、少しずつ変化していくという流れのなかでこれらの石仏を位置づけておく。

さて、その他の与四右衛門的無銘石仏について解説を続けていくことにする。

貞享から元禄時代前半という早い時期に制作された黒崎神社や良縁寺（鎮西町）の聖観音菩薩立像、あるいは享保17年（1732）に安置された同形の聖観音菩薩立像はそれぞれ形が異なっている。そのため、これまでの分布調査で確認した無銘石仏のなかに共通項がある石仏を見い出すことはできなかった。

しかし、聖観音坐像については比較的同系統と考えられる無銘石仏を確認することができた。

与四右衛門銘の聖観音菩薩坐像としては、小川島觀音堂に安置されるものがある。元禄2年8月に浅井久太夫とその奥方とみられる人物が施主となつて作ったもので、六角の塔の上に蓮華座を置



写真④

き、禪定印を結ぶ觀音菩薩が安置される。塔部正面には「三界万靈十萬至聖」の文字、周囲には戒名が多く刻まれる。

この石仏に比較的似ているものとして次の二体が挙げられる。ひとつは長崎市・皓臺寺の門前に安置される石仏（写真④）である。蓮華座の下に方形の台座が置かれ、篆書による銘文が刻まれている。紀年銘として「享保十卯辛亥年」の銘が見えることから、制作時期は享保16年（1731）頃と考えられる。本像は結跏趺坐で両手を正面の腹部前で合わせ宝鉢を持つ。禪定印を結ぶ小川島の觀音と若干違いがある。また宝冠の中に刻まれる化仏も坐像で、小川島のものが立像という違いがある。その他、胸部に表現される裳上端部について、小川島のものが折り返しをつける左右非対象であるのに対し、皓臺寺のものは左右対象になる。

こうみると、両者は相違点が多く同系統のものとは考えられない。しかし、像全体のプロポーションや衣の表現方法などから、与四右衛門の作風を受け継ぐものであることは明らかである。

もうひとつは、佐賀県有明町福泉寺の聖觀音菩薩像（写真⑤）である。墓碑である台座正面には夫婦とみられる男女の戒名が刻まれ、男子は「元



写真⑤

禄元辰年一月廿日」（1688）、女子は「享保十一午年六月十一日」（1726）に没したらしく、両側面に命日が記されている。こちらの石仏はどちらかといえば皓臺寺のものと像容が近い。頭部の宝冠に刻まれる化仏は立ち姿で髪の表現が簡略化されるなど、異なる部分も若干ある。制作時期については、近似する皓臺寺の石仏が享保16年だということを念頭に入れて検討すると、妻が亡くなった享保11年前後である可能性が高いだろう。

木彫仏を意識した精巧な石仏の制作を得意とする与四右衛門の代表作は、鹿島市幽照寺の地蔵菩薩半跏坐像である。このことは、誰の目から見ても明らかであろう。この元禄9年銘が残る石仏を始めとする地蔵菩薩像は、与四右衛門銘石仏39点のなかで16点（長徳寺の六体地蔵は1点として数えた）と、最も多く制作されている。そして、そのなかで中世以来信仰が厚い地蔵像は、比較的早い時期に登場してくるようである。例えば、唐津市黒崎神社（貞享4年銘）地蔵立像や鎮西町良縁寺（元禄6年銘）の地蔵立像、そして鹿島市浅浦墓地（元禄9年銘）の地蔵立像などがある。

こうした与四右衛門銘の地蔵菩薩立像によく似ている石仏は、周辺に数多く存在するようである。最も端的なものとして唐津市隣松院（写真⑥）及び長興寺（写真⑦）、そして鎮西町法光寺（写真

(8) に安置される地蔵菩薩立像がある。唐津市内の二寺の地蔵は元禄7年(1694)の銘が台座に刻まれる。また、法光寺の地蔵は元禄8年(1695)の銘が記されており、時期的には与四右衛門が制作した良縁寺地蔵と浅浦墓地地蔵の狭間に入ることになる。

これら三体の地蔵立像について簡単に解説していく。まず、三体ともに右手に錫杖、左手に宝珠をもつ一般的な地蔵立像である。いずれも欠損部分が多く完形品であるが、野外に安置されているため苔やカビによる浸食が進みつつある。顔立ちは、それぞれ顎が細くなるタイプで、表情などはほとんど変わらない。また、衣や裳の表現についてもほぼ同一で、まるで同じ石工が制作したかのように作風がよく似る。

これらの無作者銘石仏と与四右衛門銘石仏を比較してみると、まず黒崎神社の地蔵は衣の下の胸元に見える裳上端部が表現されていない。また衣の左右の肩の作りが違っている。このことは洞済寺の地蔵にも同じ特徴が見られるが、こちらの地蔵は裳上端部を表現する。ちなみに黒崎神社に地蔵とともに安置される聖観音菩薩立像には裳上端部が表現されている。

無銘石仏三体が全体的によく似ているのは鹿島

市浅浦墓地の地蔵である。衣の表現を始め、顔立ちやその表情などには影響の有無を論じるより同じ石工の制作であり、その表現の差異は個人的技術力の範囲に納まるものであると考えられよう。

しかしながら、これらの技術的な系譜のなかで与四右衛門によって幽照寺の地蔵半跏坐像が制作されたということになると、与四右衛門に何らかの契機が訪れたと言わなければならないだろう。他の地蔵像に比べると、それほどインパクトがある石仏である。

また、長崎方面では与四右衛門的作風の地蔵立像が二体確認されている。一つは長崎市聖福寺に安置される石仏(写真⑨)である。安置堂が火事のために堂及び台座が明治25年に再建されている。台座に記された銘文によると、元禄3年(1690)6月8日に上筑後町講中が三界万靈供養のために造立したとされる。地蔵は足元が煤けており火に包まれたことを物語っているが、外に持ち出されたとみて被害は少ない。部分的ではあるが新しく赤及び金色で彩色を施している。衣の表現は与四右衛門風で非常に細やかな彫刻である。特に、裳上端部は左右対象ではなく、右側に折り返しをつけるなど、小川島の聖観音菩薩坐像と同様の表



写真⑥

写真⑦

写真⑧



写真⑨



写真⑩



写真⑪

現を施している。

いま一つは、長崎市日見岬にある堂に安置される地蔵立像（写真⑩）である。これまでに確認した地蔵立像のなかで、最も古い紀年銘を持つもので、台座に貞享2年6月（1685）と記されている。像高98cmを測り、与四右衛門銘石仏と同様の比較的大型の丸彫石仏である。特徴的なことは、黒崎神社の地蔵と同様に裳上端部の表現がないことであろう。顔は摩滅により明らかではないが、衣の表現はノミも深く精巧である。残念ながら足先が欠失している。

与四右衛門の地元である牛津町内にも、石工銘は不明であるにも関わらず、与四右衛門によるものではないかと考えられる石仏がある。その代表的なものが菩提寺である常福寺に安置されるものである。それは地蔵菩薩坐像（写真⑪）で、樽型竿石に銘文が刻まれるものである。それによると石工銘は不明であるが、谷村の念佛講中が施主となつて元禄2年（1689）に奉納されたものである。彫刻の出来は非常に良く、完形で残っている。衣の左右肩部の表現に違いが見られるが、裳上端部は左右が対象となる。しかし、結跏趺坐で右手に錫杖、左手に宝珠を持つ像形は珍しく、与四右衛

門銘の地蔵にはないパターンである。

これまで、長々と石工銘が明らかではない石仏のなかで、与四右衛門の作風に似ているものを形式別に説明してきた。これらは、最初に述べていよいに与四右衛門に影響を与えたか、または影響を受けたか不明であるが、何らかの関係を持つ重要な石仏である。これらの存在を確認し整理することによって、平川与四右衛門の作風の変遷あるいは砥川石工の制作活動の形態の変遷など、これまでよく知られていなかったことが解明されることが可能になったといえる。

残念ながら、当教育委員会のスタッフはそこに至る結論を導き出す時間的余裕、また知識やノウハウを到底持ち合わせておらず、この稿では無銘石仏の紹介に終始した。今後、専門家による広範かつ詳細な調査が進められ、与四右衛門銘石仏及び与四右衛門的作風の石仏が意味し、そこから導かれる多くの歴史的事実が明るみになることを期待したい。

最後に、この稿をまとめるにあたっては、竹下正博氏（佐賀県立博物館学芸員）の指導・助力によるところが大きい。氏には、仏教美術のイロハから石仏を見る視点など数多くのことをご教示頂いた。ここに記して、感謝の意を表します。

（大橋隆司、牛津町教育委員会）

# 平川与四右衛門と砥川石工の活動に関する一考察

これまで実施してきた石仏分布調査で浮上してきた、解明すべき大きな課題がいくつかある。

一つは、平川与四右衛門の出自と人物像である。木彫仏を模倣するかのように精巧かつ優秀な石像を彫刻する石工がいったいどのような人物であったのか。そうした与四右衛門の実像を明らかにすることは、砥川石工の歴史を解明することにつながり、また肥前地方の石造物研究にとって大きな進展になる。しかしながら、与四右衛門に関する文献資料は乏しく、「名工平川与四右衛門」の作品が現存してはいても、与四右衛門に関する情報は少ない。いつどのような家に生まれ、どのような経過を経て石仏彫刻の道を歩み、どのような契機から与四右衛門独自の作風が生み出されたのか、謎は深まるばかりである。

もう一つ関連して、砥川石工と呼ばれる谷集落を拠点とした石工集団の活動がどのようなものであったのかという問題である。石工の生活や活動の記録は少なく、これまでには文献や現存する石造物を集成しながら砥川石工の生態について言及した研究は見当たらない。

全国的にみれば、近世後期に活躍した伊那石工（長野県上伊那郡高遠町）守屋貞治を中心として、地方の石工集団についての研究が進められている。それに比べて、砥川石工を始めとした肥前石工に関する研究は立ち遅れている感が否めない。

しかしながら、今回「平川与四右衛門」という石工の作品を集成する調査の過程で発掘して知り得たこともいくらかある。これらの情報を整理しながら、上述した課題について検討し、解明の糸口あるいは方向性を探っていくことにしたい。

## 文字資料にみる平川与四右衛門

まず、平川与四右衛門の出自などを含めた人物像について考えてみたい。

与四右衛門という名前は、砥川石工が住んだ谷を治めた多久邑の文書「御屋形日記」を始め、文献上ではいまだに確認されていない。佐賀県北方町在住の郷土史家松江信彦氏の御教示によれば、「御屋形日記には砥川石工に関する活動の記載はあるものの、石工名として与四右衛門の名が登場するのは確認していない」という。この日記はマイクロフィルムでも保存されており、筆者も貞享年間～宝永年間にかけて目を通してみたが、与四右衛門名は発見することができなかった。

また、石造物に刻まれた石工名としてはすでに報告されているリストで分かるように肥前、肥後地方に散在する39点の石造物のうち33点に実際に刻まれている。しかし、これら石仏の銘文のなかには与四右衛門の人物像を嗅ぎ取ることができるような情報は含まれていない。

その他で、これまで与四右衛門の名前を確認できるものは菩提寺である常福寺（牛津町谷）に所在する墓碑及び与四右衛門の末裔とされる平川家が所有する位牌のみである。一方の常福寺の墓碑には「俗名 平川与四右衛門」「蘭室将芳信士」「正徳三葵夫閏五月初八日」と刻まれているのに対し、平川家に伝わる位牌には「宝山寿岳禪士」「宝暦五乙亥天六月十八日」と記されている。

旧牛津町史など従来の説明では、平川与四右衛門を一人の名工として位置付け、元禄年間～宝暦年間までの約60年間、青年期から晩年期までの制作活動を想定してきた。しかし、この墓碑と位牌にみられる戒名及び没年の食い違いは、通説となっていた与四右衛門像を一変させる重要な点であると推察される。つまり、墓碑と位牌の銘文の違いは、素直に考えると人物の違いと捉えられる。言い換えれば、平川与四右衛門という名は世襲されたもので、初代～二代の平川与四右衛門が存在する可能性が高いということである。

実際、与四右衛門の活動の足跡ともいえる石仏の制作からみると、正徳2年(1712)の多良岳役行者像の制作から享保12年(1727)の合志町竹迫の六体地蔵像まで、約25年の空白期間がある。その間の正徳3年を没年とする戒名「蘭室将芳信士」の位牌が存在する。また享保21年(1736)から宝暦2年(1752)まで約16年の空白期間がある。この期間に入る位牌は見つかっていない。もう一つの位牌は宝暦5年の没で、江北町天子社石像と宝暦9年の大町町長徳寺の六体地蔵像の間にいる。

こうみると、与四右衛門銘石仏の制作期間は四つの期間に分けることができる。その期間に墓石と位牌を当てはめると、初代と三代に当てはまることになる。二代及び四代の存在は不明であるが、二代については16年の空白があるにも関わらず、三代と同一人物という可能性もある。しかし、宝暦9年銘の石仏の存在は没年以後の制作であることから、それ以前の与四右衛門とは別の人といわざるを得ない。つまり、与四右衛門は少なくとも三代世襲された石工の棟梁名であるということができるだろう。

こうした与四右衛門名の世襲の可能性は、その後常福寺の調査によって裏づけられたといえる。

平成10年4月、牛津町教育委員会が行った常福寺の有形文化財調査において、同寺の位牌所から、墓碑及び平川家に安置される位牌と同じ戒名が記された二つの位牌が発見された(写真参照)。同寺に伝わる話では多久家の位牌所とされる一画に他の位牌とともに安置されていた。多久家の位牌は、他の位牌に比べて大型で装飾が施されるなど、武士階級の身分の位牌であることが分かる。

また、与四右衛門の位牌を所有する平川家の当主である平川歳治氏への聞き取りによると、①その昔多久家の庵寺が所在し、多久家の墓碑が建つ場所を貰い受けたこと、②その昔この谷に多久姓の家があったこと、③幼少の頃には佐賀市城内に所在する多久家に入りしていたこと、など平川家と谷の多久家の関係を示す由縁がある。その両家の関係がいかなるものかは不明であるが、ひとつ興味深い史実がある。

砥川石工の拠点である谷集落には、与四右衛門



銘布袋像が安置される熊野権現社がある。この権現の開山は後藤遊仙である。『丹丘邑誌』によると、遊仙は武雄塚崎領主であった後藤貴明の子で多久安順の養子になった茂富の弟とされる。安順の跡を嗣いで多久二代藩主となったのは、茂富の子である多久茂辰であり、遊仙にとって甥にあたる。遊仙は茂富の命により山伏となり、熊野・羽黒・彦山に入峰、石藏坊と号した。また、谷に熊野権現を勧請し、社殿を建立して住したと伝えられる。この後藤遊仙について、『丹丘邑誌』は次のようにも記す。

「.....禄ハ辞シ、□後藤次郎太夫季明へ譲与へ、嫡子殷盛へハ坊家、宅地等ノ物ヲ譲リタリ、又命アリテ氏ヲ賜リ、多久遊仙ト称シ奉仕、仍テ季明も多久氏ヲ賜リシ也、右の家柄ユヘ拝礼ヲ遂ルトキハ山伏ノ上席也.....」

つまり、遊仙は茂辰の家来として多久氏を名乗ることを許され、拝礼の時は山伏の上席に座る身分であった。また、遊仙の甥である後藤季明には高百石の禄を譲って多久氏を嗣がせ、熊野権現社と宅地は嫡男である殷盛に譲り後藤氏を嗣がせたことが分かる。

与四右衛門たち石工が拠点とした谷という集落

の中には、邑主である多久家と深い関係にある遊仙を始めとする多久氏が住み、石工集団と深い関係にあったことが推測されるが、明確な関係は不明である。いずれにしても、与四右衛門は砥川石工を束ねる石工の棟梁のひとりであり、「尉」など武士の位を付加して石仏にその名を刻むことができ、「苗字帯刀」を許された“特別扱い”的石工であったといえる。

これらのことから与四右衛門の出自について推察すると、多久氏との関係を有する武士の出身であった可能性もある。そう考えれば、与四右衛門を名乗る二代の位牌が常福寺内の多久家所縁の位牌所に安置されていたことも納得ができる。

もう一つの推測は、与四右衛門が百姓であるにも関わらず、平川姓を堂々と名乗り帶刀できたのは、谷に住む多久氏と主従関係を結んだ「被官」の一人であったからかも知れない。また、多久家の日記『御屋形日記』明和7年9月26日の条には、石工の棟梁である「武富勝左衛門」が足軽に召されたことも記されており、石工の棟梁が武士の身分に取り立てられることは一般的であったと考えられる。

#### 石工集団の活動

平川与四右衛門の活動の範囲が肥前から肥後に至る広範な地域に及んでいることは、当時の封建社会、幕藩体制のなかで、非常に特異なことである。そもそも、砥川石工という集団はどのような活動を行っていたのか、これまでの調査で収集した情報を整理しながら解説していこう。

まず、砥川石工の活動の拠点であった谷の支配体制について、簡単にまとめておきたい。

佐賀藩は領内に小城、鹿島、蓮池の三支藩を成立させる以外に同様の自治領（大配分）を認めていた。親類の白石、川久保、久保田、村田と親類同格とした龍造寺氏系の多久、武雄、諫早、須古などである。

多久氏は龍造寺隆信の子長信が邑主となって始まる家系で、その子である多久安順を初代とする。谷を含めた牛津町砥川村は、当初は多久私領として存在したが、元和7年(1621)の「三部上地」の

際、砥川村はその対象として本藩の蔵入りとなる。ところが、多久家に残る「御屋形日記」明和9年11月20日の条には、以下のような記載がある。

(抜粋)

「百姓共年來長門重恩を請、於私領渡世仕来」  
「候處今度上り地ニ相成候付而ハ百姓も却而地方ニ」  
「相付不罷出候而不相叶、其通ニ而ハ深々迷惑ニ」  
「存候然ハ石工之儀、往古テ仕来居候者多ク御座」  
「候得バ田作ニ相離候而茂右繩工を以末々渡世」  
「仕私領内ニ罷在度吉重疊申断候ニ付砥川」  
「村之内レ之地方相残し右ニ數十人の百姓」  
「相付居候□去少分之地方ニ而作方之渡世不」  
「相叶石工之儀も御園中所々罷出事ニ候ヘバ」  
「御私領内ハ渡世ニ相成候程之細工無御座」  
「旅出被差免候て近国を近相衢何とそ末々」  
「相續仕度申歎候付長門ケ右之訳筋々相頼」  
「末々迄旅出之儀械差免置候依之其節ケ」  
「只今迄御切手相頼肥後五島平戸其外隣端」  
「日限御切手段々取替罷逃右を以數拾人之」  
「者共渡世仕来候.....」

砥川上下村が三部上地の際に百姓たちが本藩に組み入れられることを拒み土地を捨て、谷に移って多久藩領で生活したいと願い出たものである。昔より石工として生活するものが多く、田畠がないので石細工を仕事としていた。しかし、今度十数人の百姓が住み着き、領内には生活できるほどの仕事がなく、旅に出て近隣の国で石細工の仕事ができるように願い、長門（多久安順）よりそれが許された。そして数十人の石工が通行切手を申請し、日数を限って肥後、五島、平戸などに出稼ぎに行っていたことなどが記されている。

そもそもこの文書は、旅切手を申請した砥川石工の与頭7人に対して願書に不行届があり許可が保留されたことに始まる。佐賀本藩は年の大半を領地外に出稼ぎする砥川石工に対し、領内で石細工業を営み常住することを狙っていた節がある。出稼ぎ仕事をさせないため旅切手の許可を保留する本藩の仕業に困窮した石工たちは、長門（安順）時代の三部上地まで遡る出稼ぎ石細工の事情を述べ、旅切手の許可に配慮を求めた。その嘆願書の写しがこの資料である。この件に関する資料の中には、当時8人の石工与頭がおりそのうちの7人が遠方に石細工の出稼ぎに出ていたことが記

される。この与頭はそれぞれが石工数人を抱える工房主と考えられる。この石工与頭の上に集団をまとめる石工棟梁が存在していたのであろう。

与四右衛門が活躍していた時代においても、砥川石工の構成は上述したものと同様であったと考えられ、与四右衛門は石工棟梁の身分にあったはずである。

ともあれ、砥川石工は元和七年の「三部上地」を契機として、遠方に出稼ぎして生活の糧を得ていた。与四右衛門銘の石仏が肥前・肥後を中心とする北部九州に点在することは、このことを背景にして考えることができる。「御屋形日記」のなかには、砥川石工が出稼ぎに行く際に願い出る旅

## あとがき

平川与四右衛門の銘が入る石仏の分布調査は、本報告により一応の終了を迎えたが、報告書をまとめていくなかで様々な課題が浮上してきたといえる。今まで、町内の石仏調査から始めて約5年を経過しているが、調査報告書の作成はその間に収集したデータを単に一般公開する作業を行ってきたに過ぎない。つまり、分布調査による基礎資料の整理が完了した段階に過ぎないということである。従って、今回付論として4本の論文を収録したが、これらは、現状での位置付けと今後の課題を明らかにしたものであるということができるだろう。)

文化財保護行政に携わる我々は、「砥川石工」という歴史的文化遺産を前にしながら、これまで長く放置してきた。その罪は大きい。町民のなかには、彼らが残した石仏が多くの心ない人々によって失われていくことに胸を痛めた人も多いのではないだろうか。当教育委員会発行の『ふるさとの石仏たち』の最後でも述べたが、そうした状況を少しでも改善し、町民が「石工の里」としての誇りを持ち、これらの文化遺産を後世に継承していくための第一歩を踏み出したところである。その気持ちは、本報告書をまとめ終えた現在でも変わらない。というより、砥川石工の実体を知るためにには「御屋形日記」など有力な文献資料が存

切手の許可に関する記事が残されており、出稼ぎが恒常的であったことを物語っている。

「御屋形日記」の中の砥川石工に関する記事の切貼り的な解説で半端な展開であるが、紙枚に限りがあるため、より詳細な砥川石工の活動については今後の課題としたい。

「御屋形日記」の解読については松江信彦氏（北方町文化財保護審議委員）にお願いした。氏にはお忙しい中、膨大な量の資料より砥川石工に関する記事を抜き出し、解説して頂いた。氏の精力的な作業とご教示がなければ、この稿は成立し得なかった。ここに記して、感謝する次第です。

（大橋隆司）

在することが分かり、ますますこの調査の重要性がクローズアップしているといえる。今後は「砥川石工」をテーマにした細かい歴史の掘り起こしを進めていく必要があることを痛切に感じている。

平川与四右衛門銘の石仏は、近世美術史のなかでも重要な位置を占めるものであることが少しずつ分かってきた。また、このテーマを探究していくことが、砥川石工の実体に迫る有効な方法であることも今回の調査で明らかになってきた。当教育委員会では、そうした点を踏まえて今後の活動に取り組んでいきたい。

最後に、本報告書の刊行によって、我々が見過ごした地域あるいは手が届かなかった地域の方々より平川与四右衛門及び砥川石工に関する情報の提供があり、一層の拡充が図られていくことを心から願っている。

## 【参考文献】

1. 「牛津町史」（平成2年3月、牛津町史編纂事務局）
2. 「牛津町史」（昭和33年12月、伊東祐治著、牛津町史編纂委員会）
3. 「野田家日記」（昭和49年4月、西日本文化協会）
4. 「ふるさとの石仏たち」（平成8年3月、牛津町教育委員会）
5. 「佐賀県史」（昭和43年7月、佐賀県史編さん委員会）
6. 「大町町史」（下巻、昭和62年9月、大町町史編纂委員会）
7. 「北方町史」（中巻、昭和61年3月、北方町町史編さん事務局）
8. 「玄海町史」（下巻、平成9年3月、玄海町町史編纂委員会）
9. 「塩田町の史跡と文化財」（昭和46年3月、塩田町教育委員会）
10. 「佐賀県社寺調査報告書」（平成8年3月、佐賀県立博物館）
11. 「佐賀の信仰と美術」（平成9年1月、佐賀県立美術館）
12. 「石の歴史」（昭和44年3月、佐賀県文化館）
13. 「山内町の石仏石像」（平成7年4月、浦川晟）
14. 「石仏調査ハンドブック」（平成5年8月、庚申懇話会、雄山閣出版）
15. 「石仏研究ハンドブック」（昭和60年6月、庚申懇話会、雄山閣出版）
16. 「日本石仏辞典」（平成8年6月、庚申懇話会、雄山閣出版）
17. 「図解文化財の見方」（昭和59年7月、山川出版）
18. 「肥後金石研究」（第10号、平成2年6月、肥後金石研究会）
19. 「仏像の知識百科」（平成5年8月、主婦と生活社）
20. 「重要文化財眼鏡橋移築修理工事報告書」（昭和36年、諫早市教育委員会）
21. 「嚴木町の肥前狛犬」（平成9年3月、嚴木町教育委員会）
22. 「丹丘邑誌」（平成5年10月、文献出版）

牛津町文化財調査報告書第14集

## 石工「平川与四右衛門」の軌跡

— 肥前小城郡砥川の名工が残した石仏をめぐって —

平成11年3月31日

発行 佐賀県牛津町教育委員会

佐賀県小城郡牛津町大字柿橋瀬1100-1

印刷 株式会社音成印刷

佐賀県小城郡小城町253-4

